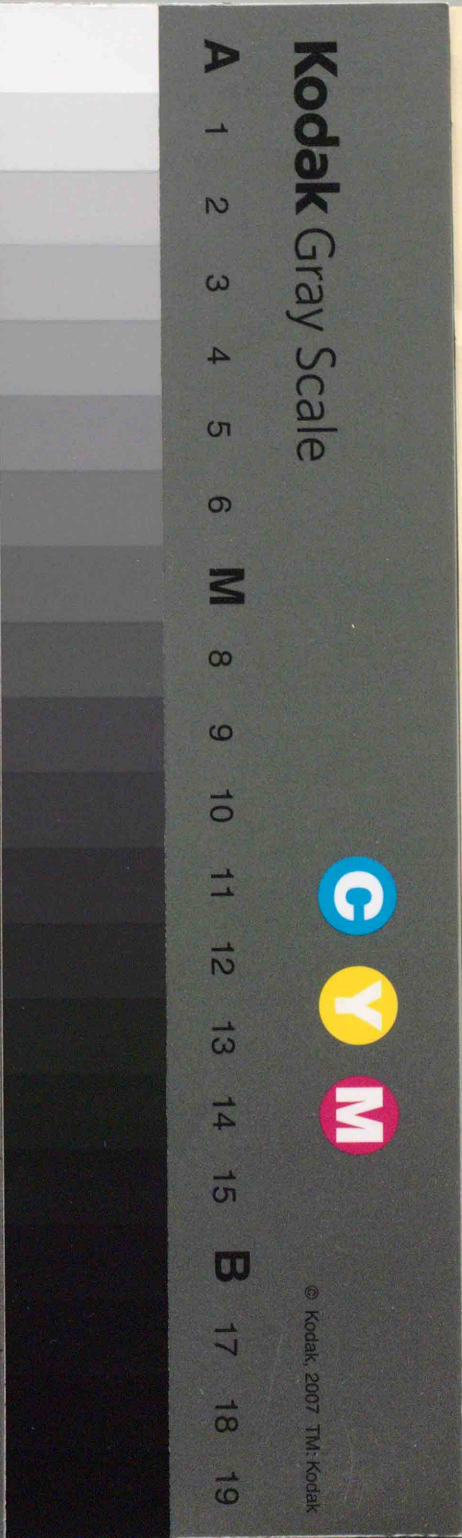
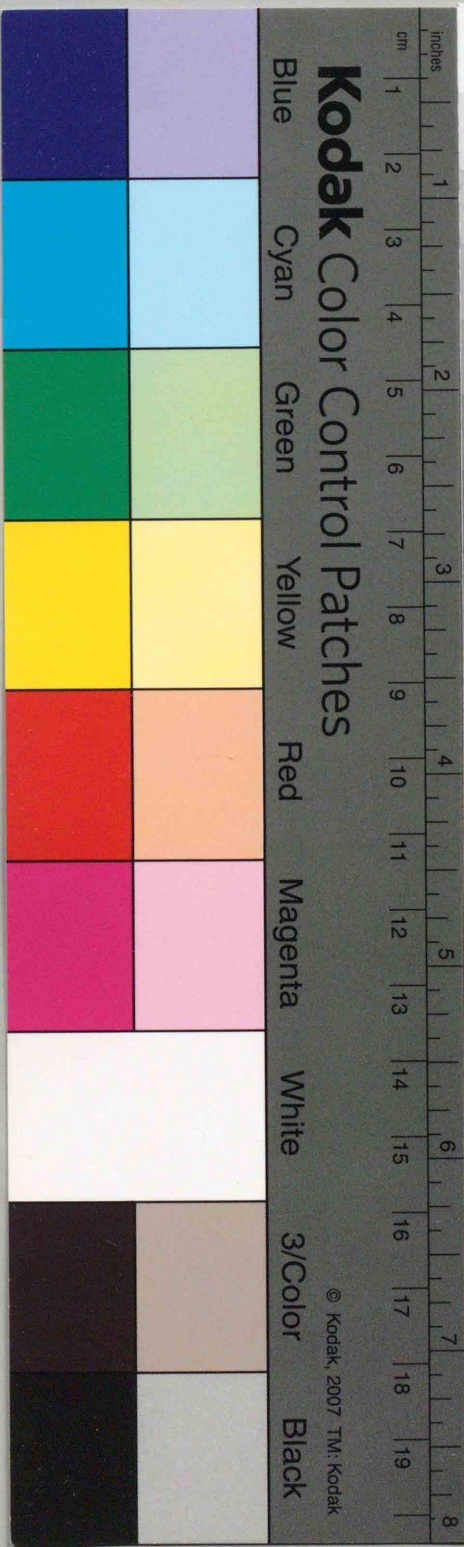
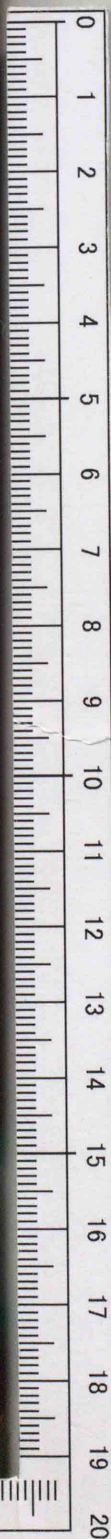




教  
3  
25



43220

教科書文庫

4
8/0
31-1938
25000 28304





教科書文庫

4

810

31-1938

2500028304



小學國語讀本 卷十

文部省

尋常科用

登録番号

28304

分 375.98

類 M

広島大学図書

2500028304





目録

第一	明治神宮	一
第二	霧	七
第三	科學博物館	八
第四	足助次郎重範	十四
第五	水兵の母	十八
第六	南洋だより	二十四
第七	朝顔に	三十六
第八	雨の養老	三十七
第九	柿の色	四十七
第十	稻むらの火	五十二
第十一	朝鮮の田舎	六十
第十二	水彩畫	六十七
第十三	久田船長	七十
第十四	母の力	七十八
第十五	水師營の會見	八十八
第十六	張良と韓信	九十三
第十七	雪の山	九十七
第十八	南極海に鯨を追ふ	百十三
第十九	パナマ運河	百二十
第二十	冬の月	百三十二
第二十一	國法と大慈悲	百三十四
第二十二	開票の日	百四十一
第二十三	春淺し	百四十八
第二十四	熊野紀行	百五十
第二十五	汽車の發明	百五十六
第二十六	「あじあ」に乗りて	百六十二
第二十七	御民われ	百七十四

尋國十

尋國十

第一 明治神宮

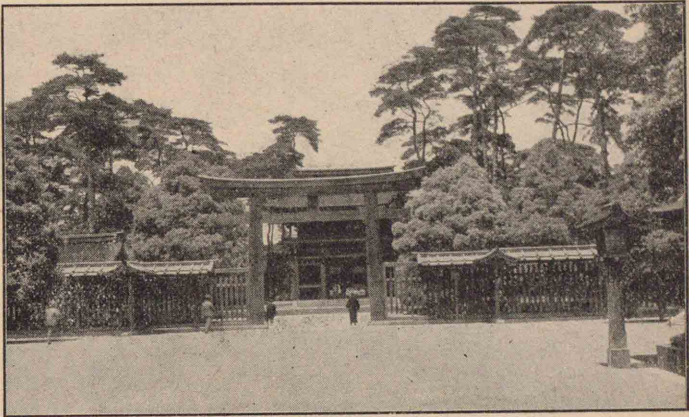
參拜

自 紋

神宮橋を渡りて、先づ仰ぐ大鳥居に、菊花の御紋章を拜するかしこさ。南參道に入れば、夜來の雨に清められし玉砂利さくくと鳴りて、參拜の人々、あたかも言合はせたる如く、足並の自ら揃ふも尊く思はる。御造營當時、國民の眞心もてたてまつりたる木は、參道の左右を始め、至る所すき間もなき木立となりて、神域しんみきいよくおごそかならんとす。



折



左折して更に大鳥居を過ぎ、神氣身にせまるをおぼえつゝ、静かに歩みを移せば、参道は又右折す。此の時、正面やゝ遠く拜する南神門のけだかさ、美しさ。玉垣に連なる鳥居の奥に、すがくしき赤松の木立を負ひたる樓門は、一幅の彩畫に似て、しかも莊嚴のおも

むきをそへたり。

水屋の水に口すゞぎて、此の門を入れば、中央の拜

砂

殿、左右の廻廊、庭上の白砂、すべて清らかに、おごそかなり。

拜殿に進み、明治天皇、昭憲皇太后御二柱の神の御前に、うやくしくぬかつく。

つゝしみて、御在世中の大御歌、御歌をしのびまつれば、

とこしへに民安かれと祈るなるわが世を守れ伊勢の大神

神風の伊勢の内外の宮柱ゆるぎなき世をなほ祈るかな

外



親

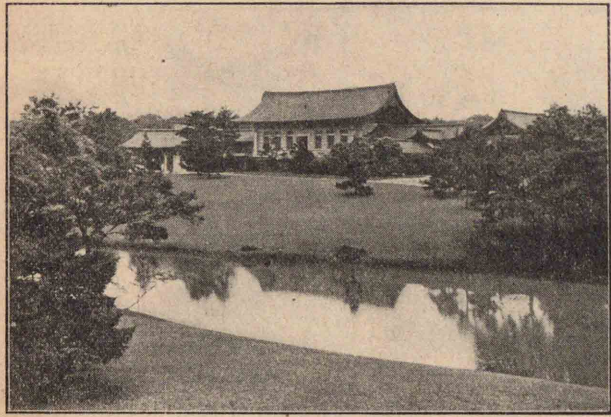
と、神かけて祈らせ給へるを、今どこしへに神靈と鎮まりまして、御親ら世を守り、國を鎮め、民草をもみそなはずらん。大御心のかたじけなき、そゞろに涙の

わき出づるをおぼゆ。

寶物殿

西神門を出でて行く道は、しばし森林の間に人をいざなふ。やがて木立遠ざかりて、緑の芝生遠く廣く續き、道いとはるかなる彼方に、寶物殿を望む。

彼方



如何

異用筆硯

極

殿内に入りて御遺物を拜觀す。日常の御生活の如何に御儉素にわたらせられしか。御机は紫檀にも黒檀にもあらずして、たゞ黒きぬり机なり。竹の御硯箱は何のかざりもなく、筆鉛筆等、小學生の用ふる物と異なる所なし。昭憲皇太后の御硯箱は、ふたの裏に石盤をはめ、石筆はちびてわづかに寸餘を残すのみ。まことに恐れ多き極みといふべし。

舊御殿舊御苑

舊御殿舊御苑は、もと豊島御料地として、御二柱の神に御由緒深き所。御殿とは申せど、質素なる平屋に



玉

して、行幸ありし時の玉座、今も其のまゝに拜せらる。

舊御苑に入れば、木立深く、

道めぐり、池の眺廣き所に、御

茶屋ありて、隔雲亭かくうんていといふ。

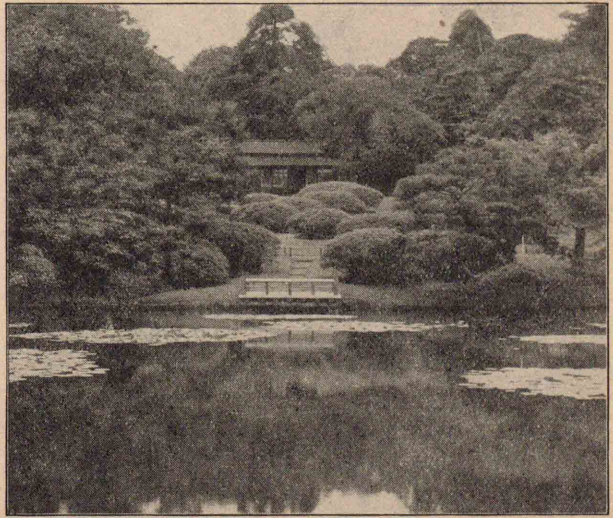
ほのかに承れば、此の御苑は、

明治天皇御親ら森の下道、下

草まで何くれと御仰ありて、自然のまゝに造らせ給

ひ、昭憲皇太后かぎりなくめでさせ給ひて、しばく

行啓あらせられたりとぞ。昔の武藏野むさしのの面影、其の



面啓

自

まゝ、今に残りて、どこしへに大御心をしのびまつるも、いとかしこしや。

第二 霧

しらぐくと、朝霧 野山をこめて、

月のごと、日輪 ほのかに浮かぶ。

野路を行く 人影 たゞちに消えて、

けたゝまし、もずの音、梢はいづこ。

谷間より はひ出で、木の幹ぬらし、

しらぐと、おぼろに 朝霧流る。

輪



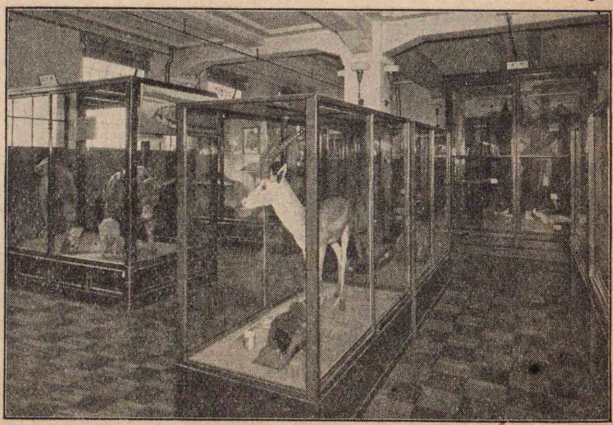
しめやかに、夜の霧 ちまたをつゝみ、  
 立ち並ぶ 家々、燈火うるむ。  
 影のごと、人去り 人來る大路、  
 ほろくと 聞ゆる 笛の音いづこ。  
 窓ぎはに はひ寄り、ガラス戸ぬらし、  
 しめやかに、ひそかに 夜の霧流る。

第三 科學博物館

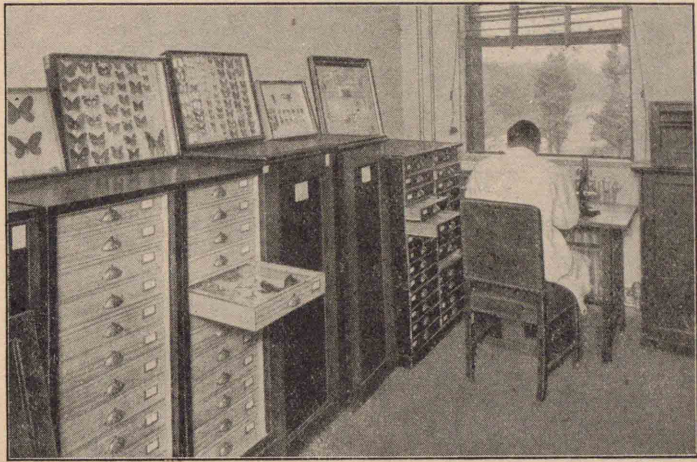
採集 博科

夏休に採集した蝶を調べようと思つて、妹と一し

よに、上野の科學博物館へ行つた。  
 案内圖を見ると、動物の陳列室  
 は二階になつてゐる。僕等は、機  
 械のたくさん陳列してある間を  
 通つて、すぐ二階へ上る。珍しい  
 動物の標本が一ぱいならんであ  
 る。去年、先生に連れられて來た  
 時、こゝで忠犬ハチ公や、マンモスの牙きばなどを見てか  
 ら、講義室でお話を聞いたり、映畫を見たりしたこと  
 が思ひ出される。







窓際に蝶の標本が陳列してあるが、いくら調べても僕の取つたやうなのがない。掛の人に聞くと、

「昆虫室がありますから、そこで調べてもらなさい。」と案内して下さつた。

そこには、たくさんの標本がたんすの引出にはいつてある。餘り多いのでまごくしてみると、向かふのすみで顕微鏡をのぞいてみた人が、

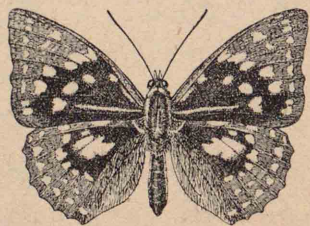
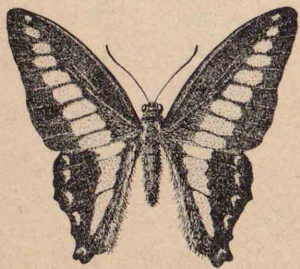
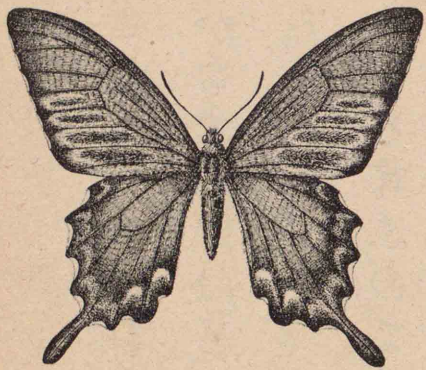
考

ここにこしながら、

「蝶なら、左側の鱗翅類と書いたたんすの引出を、ごらんなさい。参考書が見たければ、三階の圖書室にありますよ。」

と親切に教へて下さつた。

順々に引出をあけて見て行くと、色々の蝶の中に、とうく僕のと同じものが見





つかつた。

「あつた、あつた。これだ。『おほむらさき』だ。」

なほ探して行くと「からすあげは」と「くるたいまい」であることがわかつた。

妹がきのこを見たいと言ふので、其の人にお禮を言つて三階へ行く。

大きなガラス箱の中に、毒のあるきのこや、食用になるきのこが、自然に生えたやうに出来てゐる。生き生きとしてみても、どうしても模型とは思へない。

突然、下の方から大きな聲が聞えて、はつとした。

暗| 驗

何だ、二階の擴聲機だ。

「皆さん、これから暗室で、エックス線の實驗が始ります。」

急いで地下室へ降りた。もう十人ばかりも集つてゐた。

寫| 貨

やがて電燈が消えると、掛の人がエックス線の實驗をする。太つた人がふところから大きながま口を取出して寫したが、中には、穴のあいたニツケル貨がたつた二枚しか無かつたので、皆がどつと笑つた。僕が手を出すと、骨だけが黒く見えて、何だか氣味が



悪かつた。

屋上へ出ると、市内が一目に見えて、すばらしい眺だ。秋の空が青くすんで氣持がよい。僕たちは、両手をあげて深呼吸をした。

天體觀測室の丸屋根に、烏が一羽止つてゐる。

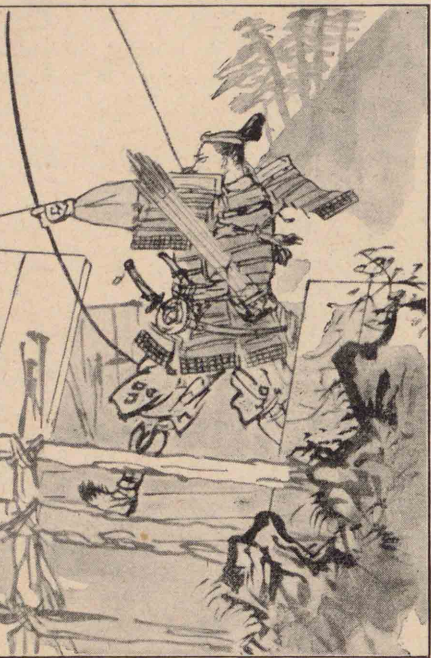
第四 足助次郎重範

元弘の昔、賊の大軍、笠置山の行在所をおそひ奉りし時、足助次郎重範は、一族を引連れて一の木戸を守りゐたり。

未 河

賊は其の勢七萬餘、岩角を傳ひ、かづらに取りつき、未明に乗じて一の木戸にせまり来る。

時に重範、木戸の上なる櫓に上りて、名乗りけるは、



「三河國の住人足助次郎重範、かたじけなくも一天の君に命を捧げまゐらせ、此の木戸を固めたり。萬乘の君のおはします城なれば、大將軍の御出であらんと心得て、大和鍛冶のきたへたるよ



き矢じりを少々用意致して候。一筋受けてごらんじ候へ。」

と、三人張の弓に十三束三伏の矢をつがへ、満月の如く引きしぼりて、ひようと放つ。其の矢は、るかなる谷をへだててひかへたる荒尾九郎が甲を通して、脇腹まで貫ぬきければ、荒尾は馬より真逆さまにどろりと落ちて、其の場に死す。

弟彌五郎、これを敵に見せじと矢面に立ちふさがり、進み出で、

「足助殿の御弓勢、日頃承り候ひし程にはなかりけ

仕

眉真向

り。こゝを遊ばし候へ。御矢一筋受けて、甲の程をためし候はん。」

と、胸をたゝいて聲高らかにのゝしれば、

「さらば、今一矢仕り候はん。受けてごらんじ候へ。」と、十三束三伏、前よりもなほ引きしぼりて、はたと射る。ねらひ違はず、彌五郎が胃の真向くだきて、眉間の真中にぐさと射込みたりければ、物をも言はず兄弟同じ枕にたふれたり。

これを戦の初として、寄せ来る敵を射たふし射たふし、防戦につとめければ、雲霞の如き賊兵も引退き、



陷河原

たゞ城の四方を圍みて、遠攻めにするばかりなり。其の後、關東の大軍至るに及び、城遂に陥り、重範惜しくも捕へられて、六條河原に斬らる。重範死してこゝに六百餘年、忠義にかをる弓矢のほまれは、年と共にいよゝゝ高し。

第五 水兵の母

某

明治二十七八年戦役の時であつた。或日、我が軍艦高千穂たかちほの一水兵が、手紙を読みながら泣いてゐた。ふと通りかゝつた某大尉がこれを見て、餘りにめ、

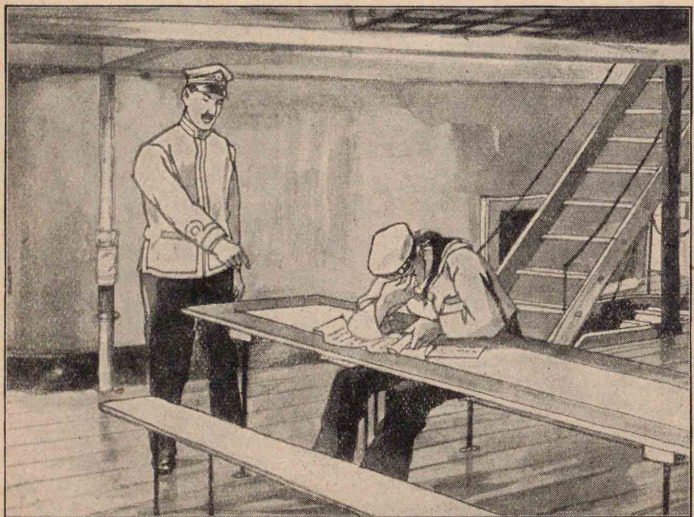
妻 男 目 帝

しい振舞と思つて、

「こら、どうした。命が惜しくなつたか。妻子がこひしくなつたか。軍人となつて、軍に出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」

と言葉鋭く叱つた。

水兵は驚いて立上つて、し





ばらく大尉の顔を見つめてゐたが、やがて頭を下げ  
て、

「それは餘りなお言葉です。私には妻も子もあり  
ません。私も日本男子です。何で命を惜しみま  
せう。どうぞ、これをごらん下さい。」

と言つて、其の手紙を差出した。

大尉がそれを取つて見ると、次のやうな事が書い  
てあつた。

「聞けば、そなたは豊島沖の海戦にも出でず、又八月  
十日の威海衛攻撃とやらにも、かく別の働なかり

由念報

し由、母は如何にも残念に思ひ候。何のために軍  
には出で候ぞ。一命を捨てて、君の御恩に報ゆる  
ためには候はずや。村の方々は、朝に夕に、いろい  
ろとやさしくお世話なし下され、一人の子が御國  
のため軍に出でしことなれば、定めて不自由なる  
事もあらん。何にてもゑんりよなく言へ。」と、親切  
に仰せ下され候。母は其の方々の顔を見る毎に、  
そなたのふがひなき事が思ひ出されて、此の胸は  
張りさくるばかりにて候。八幡様に日參致し候  
も、そなたがあつぱれなるてがらを立て候やうと



願

察

の心願に候。母も人間なれば、我が子にくしとは  
 つゆ思ひ申さず。如何ばかりの思にて此の手紙  
 をした、めしか、よくく、お察し下されたく候。  
 大尉は、これを讀んで思はず涙を落し、水兵の手を握  
 つて、

「わたしが悪かつた。おかあさんの精神は感心の  
 外はない。お前の残念がるのももつともだ。し  
 かし、今の戦争は昔と違つて、一人で進んで功を立  
 てるやうなことは出来ない。將校も兵士も、皆一  
 つになつて働かなければならない。すべて上官

會

の命令を守つて、自分の職務に精を出すのが第一  
 だ。おかあさんは、一命を捨てて君恩に報いよ」と  
 言つてゐられるが、まだ其の折に出會はないのだ。  
 豊島沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念  
 に思つてゐる。しかし、これも仕方がない。其の  
 中に、花々しい戦争もあるだらう。其の時には、お  
 互に目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあ  
 げよう。此のわけをよくおかあさんに言つてあ  
 げて、安心なさるやうにするがよい。」  
 と言聞かせた。



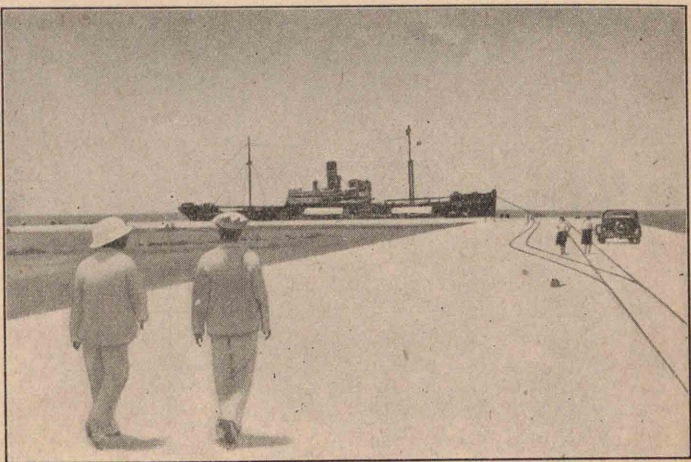
水兵は頭を下げて聞いてゐたが、やがて手をあげて敬禮し、につこりと笑つて立去つた。

第六 南洋だより

(一) サイパン

横濱の埠頭ふと頭でお別れしてから、五日目の十月二十日、私はサイパン島に着きました。

海上は、まことにおだやかでした。小笠原群島おがさわらぐんま附近を過ぎる頃から、だんく暑くなつて、それから全く真夏の氣候です。



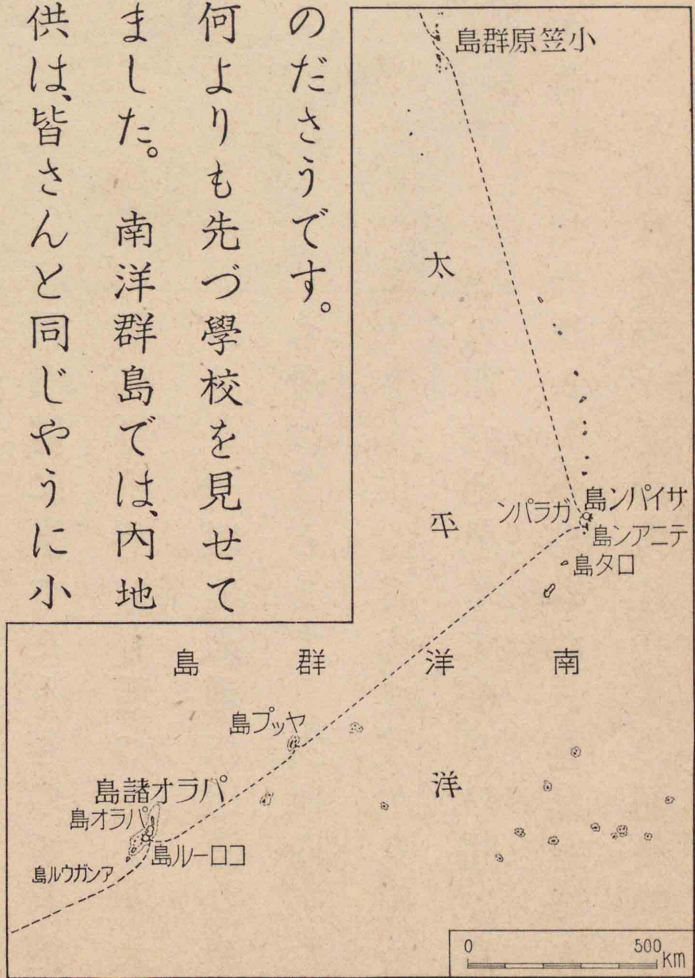
サイパンは、さすが南洋の玄関げん關口くわんといはれるだけあつて、埠頭は實に堂々たるものでした。町のガラパンも思つたより大きく、りつぱで、大通には自動車も通つてゐます。内地人がたくさん住んでゐますから、町も大體内地風ですが、其の間に島民の家がまじつて、南洋らしいおもむきを見せてゐます。こゝの島民は、チャモロ族といふのが大部分



程

で割合に色も白く生活程度も高いのださうです。

私は、何よりも先づ学校を見せてもらひました。南洋群島では内地の子供は、皆さんと同じやうに小学校に通ひ、島民の子供は公学校に通つてゐます。小学校をたづねて見ると、みんなが明かるい教室で



尋國十

獨讀

如何にも元氣よく勉強してゐました。公学校では、ちやうど學藝會がくげいの最中でした。島民の子供とはいひながら、皆さつぱりした服装をして、上手に國語の對話だいがをしたり、讀本の朗讀らうどくをしたり、獨唱どくせうや劇げきまでやつてゐるのに、すっかり感心させられました。

(二) テニアン

サイパンを出た私たちの船は、途中テニアン・ヤツプの島々に寄港し、それからパラオへ向かひました。テニアンは、サイパンやロタの島々と共に、砂糖の生産地で、南洋の寶島といはれてゐます。面積約百

積



洲 耕

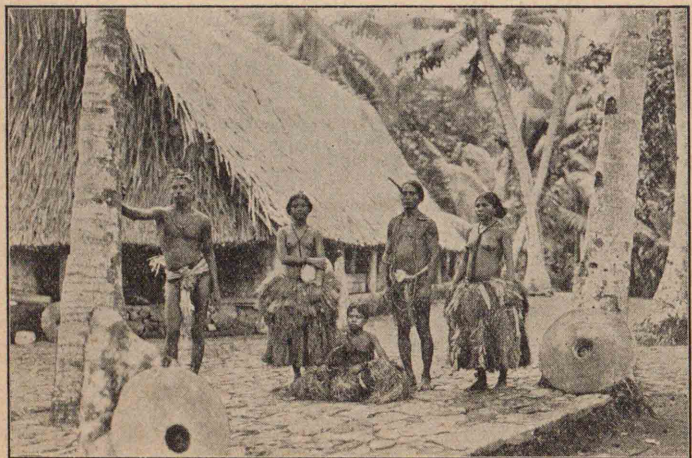


平方料、其の大部分が内地人の手で開墾され、それがほとんど皆甘蔗島です。私は島内をすつかり見廻りましたが、何千ヘクタールもある平な耕地は、見渡す限り美しい甘蔗島で、其の中にはいと、海も見えず波の音も聞えません。まあ、満洲の高梁島へでもはいつたといふ感じでした。小さい島の中といふことも、つい忘れてしまひさうでした。

極|至|

(三) ヤツプ

ヤツプでは、色の黒い、體のたくましいカナカ族をたくさん見かけました。カナカ族はどの島にもありますが、ヤツプのカナカ族程、昔風なものはないといはれてゐます。鳥の羽でかぎつた櫛をさした男、大きな腰みのを着けた女、全く原始的な風俗です。椰子の葉でふいた至極粗末な小屋の軒下





などに、大きな石が立て掛けてあるのは、石貨といつて、昔はそれで物を買つたり賣つたりしたのださうです。

赤 厚濃 湧

ヤツプからパラオまでは、約一晝夜の航程で、赤道もそろく、近づきますから、熱帯の特色がますます濃厚になります。第一、海の色が何ともいへない美しさを見せます。それは、紺とも青とも紫ともいひやうのない、深くて、しかも明かるい色です。其の上を、時々銀の小鳥の群のやうに飛ぶのは飛魚です。地平線にむくくと湧上る入道雲、内地の夕立とは

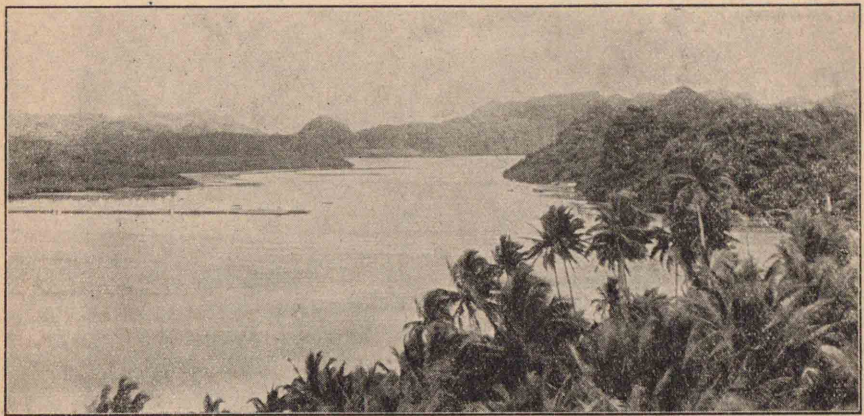
想

全く比較ひかくにならぬ、すさまじいスコール、それが忽ち晴れた後の目もさめるやうな大空の虹にじ、火のやうにもえ立つ夕焼雲——かう書並べただけでも、熱帯の海のすばらしさが、ぼく想像されるでせう。

(四) パラオ

十月二十七日の朝、目ざすパラオ諸島が來ました。遠くで見た所はたゞ一續きの小山ですが、實はたくさん島の島が集つてゐるのです。近づくにつれて濃緑の島々が別々に見え、海は深さによつて桔梗色ききやう、浅黄色、ひわ色、とりくりに染分けたやうな美しさ、じつ





と下をのぞき込むと、時々ちらりと、底の珊瑚礁が、高山植物の花か何かのやうに浮出して見えます。やがて、島と島との間のせまい水道を過ぎました。中はまるで湖のやうです。

私は、昔話の龍宮にでも来たやうな思で、コロール島に上陸しました。

長い突堤の舗装道路を自動車

で走る愉快さ。海岸一帯にぎつしりと茂つたマンガローブの青葉や、島の中央にそり立つ無線電信塔の眺が、何といふことなしに、私の胸ををどらせました。

間もなくコロールの町の大通に出ました。そこに南洋廳があり、椰子の街路樹がずらりと並んで、涼しさうなかげを作つてあります。其の下を、でつぶり太つた島民が、椰子の葉であんだかごをさげて、いいうと歩いてみます。真赤な花の佛桑花、赤黄紫色とりぐの葉のクロトンなどに囲まれた官舎のあ



るのも、此の邊でした。

コロールは、わづか八平方料の小島ですが、群島統治の中心地であり、パプア・セレベス・フィリピン等に近いので、南洋群島中最も重要な所です。

市街は、ガラパンにくらべると、小ぎれいで落着きがあります。呉服雑貨、いろ／＼の店が並んでゐる中に、珍しいのはおみやげ品を賣る店です。島民の細工といふ人形や、椰子細工の面、美しい貝殻珊瑚の類から、たいまいどかけ、極樂鳥の剥製まで、店一ぱいにかぎつてあるのが目につきます。

競 化

内地人の商店や家庭では、島民をやとつてゐる所がたくさんあります。南洋の島民といへば、皆さんは人喰人種の類とても思ふでせうが、どうしてどうして、彼等は今や文化人の仲間です。十一月三日の明治節に運動會があるといふので、島民の青年たちが、コロールの大運動場で、毎日陸上競技の練習をやつてゐる、あの熱心な様子を皆さんに見せたら、きつとびつくりするだらうと思ひます。

私は、次の便船で、セレベスのメナドから、フィリピンのダバオまで行つて見るつもりです。



第七 朝顔に

千代

朝顔につるべ取られてもらひ水

木から物のこぼるゝ音や秋の風

月の夜や石に出て鳴くきりぐす

何着ても美しうなる月見かな

養

第八 雨の養老

ころぶ人を笑うてころぶ雪見かな

二人は、養老驛で電車を下りた。

「秋野君、とうく雨になつた。」

雲の低くたれた空を見上げながら、残念さうに一人  
が言ふと、

「雨の方がいゝよ。」

と、秋野君といはれた男は、すこぶるのんきである。

「物好きだなあ。名所見物に雨がいゝと言ふのは、

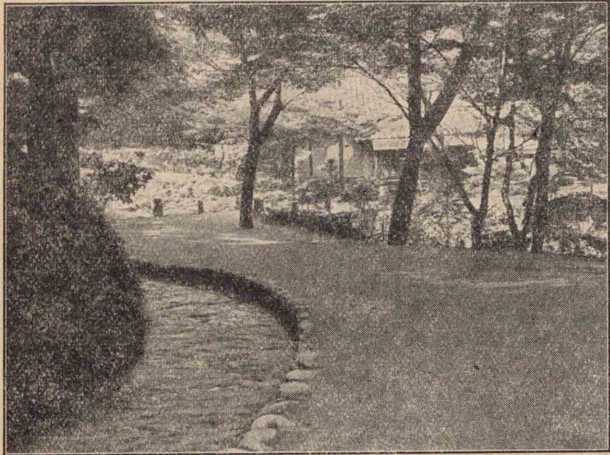


迫 境 半

恐らく天下に君一人だらう。  
 「まあ、何でもいゝ。だまつてついて来るさ。」  
 つま先上りの廣い道をたどりながら進む前には、  
 こんもりと茂つた山が見上げる程迫つて、其の頂は  
 霧に包まれてゐる。幸に雨はさして烈しくない。  
 一籽も進んだ頃から、だんくゝあたりが仙境らし  
 くなつて来る。足もとを清らかに流れる水が行く  
 人に、ひそやかにさゝやきかける。空を半ばおほふ  
 やうに、櫻や楓かへての老樹が枝をさしかはす下道は、軽く  
 曲折しながら、人を奥へくゞとさそつて止まない。

尋國十

紅葉



下枝の紅葉から紅のしづくでも落ちて、さしてゐる  
 傘からかさを染めはしないかと思はせる。

「いゝなあ。」

と、一人が思はず歎聲を發する。  
 「河井君、雨の方がいゝと言つ  
 たのは、これだよ。見給へ。  
 人つ子一人通らないぢやな  
 いか。お天氣でござん、此の  
 邊人がうよくくしてゐてね。」  
 「なるほど。」



杉

と、河井君は、うなづかざるを得なかつた。

老杉のやゝ暗い下道から、右の山へみちびく高い石段を上つて、養老神社へ参拜する。小さい社殿の

廻

右側に、玉垣を廻らした泉がある。底はごく浅いが、こんく

清水

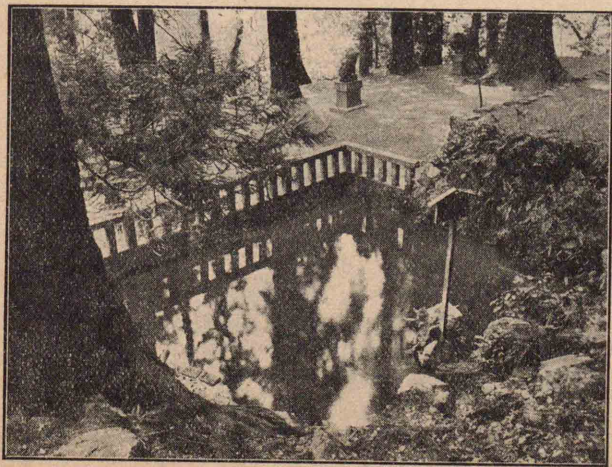
と清水が湧出てゐる。

秋野君が言ふ。

「昔、元正天皇がわざく行幸

なされた。靈泉といふのがこ

れた。



尋國十

尋國十

薪

「あ、これがさうなのか。其の事なら僕だつて知つてゐるよ。昔、或若い男が山へ薪を拾ひに行つて、谷間へすべり落ちると、不思議に酒の香がする。見れば近くに流があつて、それが皆酒だ。若い男は喜んでそれを汲み、父親に持つて歸つて孝行をした。時の天皇がおほめになつて、わざくこゝに行幸なされたといふ話だらう。すると、此の泉の水が昔は酒だつたわけだね。」

養

「河井君、其の話もあるがね、しかし歴史によると、天皇は此の泉の水をおほめになつて、老を養ふべし。」



と仰せられ、年號を養老とお改めになつたことになつてゐる。して見ると、やつぱり昔から水だつたのだ。」

「すると、あの孝子はどうなるね。」

「どうともならないさ。かういふめでたい事のあつた時には、當時の習はしとして改元になる。さうして、其の地方の孝子などを御表彰へうしやうになるのだ。あの孝子も、多分其の時に表彰された一人だらうと思はれる。」

「なるほど。それでよくわかつた。」

瀧

「さあ、そろ／＼瀧見に行かうかな。」

瀧へ行く坂道は、ぐつと急になる。左右から枝を交へた櫻や楓のトンネルが、しばらくは續く。下葉は、折から美しく色づいてゐた。脚下には、谷川の水が石をかんて、しきりにさわやかな響を靜かなあたりに傳へる。大分山が深まつて來た。雨に煙る行手から、今にも薪を負つた孝子の姿が現れさうな氣がする。

響

橋を渡つて、谷川の向かふ岸へ移る。それから數十歩坂道を上ると、左に茶亭ちやていがあつた。秋野君がす



たすたと急ぎ足に其の前を抜けて、急に河井君を振り返つた。

「見給へ。」

と指さす彼方、真直な杉の木立を傳ふやうに、白い物が上から下へと走つてゐる。河井君は、じつと目をこらした。

「あ、瀧か。」

一歩々々進むにしたがひ、木立は移動して、其の奥に養老の瀧が完全な姿を現す。そこに又小さい土橋があつた。

「此の橋から見た瀧が、僕は一番いゝと思ふ。」

と、秋野君が言ふ。正面にやゝ遠くかゝる瀧は、下にたゞみ重なる岩間を縫ひながら、分流曲折して橋下へ注ぐ。

「小さいが、實にいゝ瀧だね。」

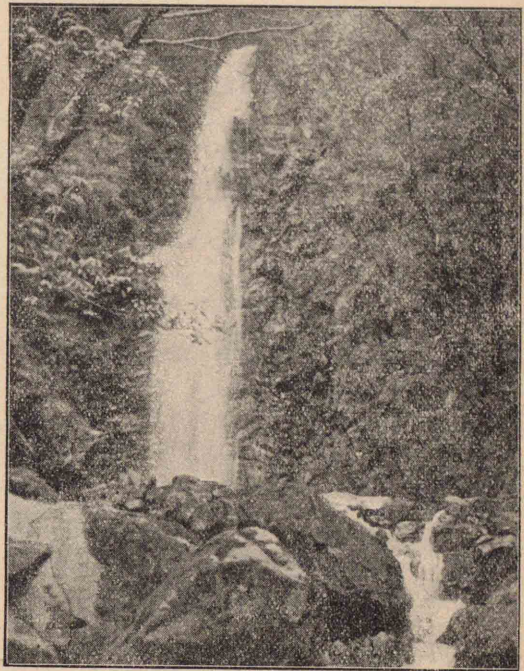
と、河井君が感心する。

「こつちへ來給へ。」

先だつて行く秋野君に従つて、橋を渡り、岩と岩の間の道を抜けて、ひよつこりと出た所に、瀧は三十米の空から白い絹をさらしかけて、下の瀧壺つぼに吸込まれ



徴



るやうに注いでゐる。  
「瀧壺のごく浅いのが、此の瀧の特徴だよ。」

と、秋野君が説明する。しかし、河井君はたま

つたまゝ、じつと落ちて来る水に眺め入つた。

大空から勢よく落下する水の太い束が、忽ちきれぎれの大きな塊になつて、次から次へ投げ下される。すると、其の塊はやがて絶壁にくだけて、白玉のすだ

絶塊

晶

れを広げる。水晶のやうに清らかで、白絹のやうに細やかである。

「いゝなあ。」

河井君は幾度かかう言つて、何時までもそこを動かうとしなかつた。

第九 柿の色

窯場かまばより出でし喜三右衛門きさゝえもんは、しばし縁先えんに休らひぬ。

日はやゝ西に傾けり。仰げば庭前の柿の梢は、大



鈴

空に墨畫をゑがき、鈴なりの赤き實、夕日を浴びて、さながら珊瑚珠さんごじゆの輝くに似たり。此の美しさに、しばし見とれたる喜三右衛門は、ふと何思ひけん、

「おゝ、それよ。」

とつぶやきて、忽ち

又窯場へ引きかへ

しぬ。

其の日より、喜三

右衛門は、赤色の焼

附に熱中し始めたり。されど、目ざす色はたやすく



碎

息

奪

弟子

現るべくもあらず、日毎に焼きては碎き、碎きては焼  
き、果はたゞばう然として歎息するばかりなり。

苦心はそれのみにあらざりき。研究に費す金は

次第にかさみ、しかも工夫に心を奪はれては、自ら家

業もおろそかならざるを得ず。やがて其の日の生

計も立ちがたく、弟子たち此の師を見限り去りて、手

助けする者一人もなし。人は此の有様を見て、たは

けとあざけり、氣ちがひとのゝしる。されど、喜三右

衛門は動かざること山の如く、一念たゞ夕日に映ゆ

る柿の色を求めて止まざりき。



かくて數年は過ぎたり。或日の夕、あわたゞしく  
窯場より走り出でたる彼は、

「薪、薪。」

と叫びつゝ、手當り次第に物を運びて、窯の火にことごとく投じたり。

其の夜、喜三右衛門は、窯のかたはらを離れざりき。鶏の聲を聞きては、はや心も心にあらず、窯の周圍をぐる／＼と廻り歩きぬ。

夜は明けはなれたり。胸ををどらせつゝ、やをら窯を開かんとすれば、今しも朝日はなやかにさし出

皿眼

巧陶

でて、窯場を照らせり。

一つ又一つ、血走る眼に見つめつゝ、窯より皿を取出し、みたる彼は、やがて「おゝ」と力ある聲に叫びて立上れり。

あゝ、多年の苦心は遂に報いられたり。彼は一枚の皿を両手に捧げて、しばし窯場にこをどりしぬ。

喜三右衛門は、やがて名を柿右衛門と改めたり。

柿右衛門は、今より三百餘年前、肥前ひぜんの有田に出でし陶工なり。彼は、其の後いよ／＼研究を重ね、工夫を積み、遂に柿右衛門風と呼ばるゝ精巧なる陶器



甚

を製作するに至れり。其の作品はひとり我が國に  
もてはやさるゝのみならず、遠く西洋諸國に傳はり  
て、名工のほまれ甚だ高し。

第十 稻むらの火

「これはたゞ事でない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出て來た。今の  
地震は、別に烈しいといふ程のものではなかつた。  
しかし、長いゆつたりとしたゆれ方と、うなるやうな  
地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したこと

ない無氣味なものであつた。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見  
下した。村では、豊年を祝ふよひ祭の支度に心を取  
られて、さつきの地震には一向氣がつかないもの  
やうである。

村から海へ移した五兵衛の目は、忽ちそこに吸附  
けられてしまつた。風とは反對に波が沖へくと  
動いて、見るく海岸には、廣い砂原や黒い岩底が現  
れて來た。

「大變だ。津波がやつて來るに違ひない。」と、五兵衛



は思つた。此のまゝにしておいたら、四百の命が、村もろ共一のみによられてしまふ。もう一刻も猶豫は出来ない。

「よし。」

と叫んで、家にかけて込んだ五兵衛は、大きな松明を持つて飛出して来た。そこには、取入れるばかりになつてゐるたくさんの稲束が積んである。

「もつたいないが、これで村中の命が救へるのだ。」と、五兵衛はいきなり其の稲むらの一つに火を移した。風にあふられて、火の手がぱつと上つた。一つ

救

没 薄



又一つ、五兵衛は夢中で走つた。かうして、自分の田のすべての稲むらに火をつけてしまふと、松明を捨てた。まるで失神したやうに、彼はそこに突立つた

まゝ、沖の方を眺めてゐた。

日はすでに没して、あたりがだんく薄暗くなつて来た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、此の火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。莊屋さんの家だ。」



と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。續いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追ふやうにかけ出した。

高臺から見下してゐる五兵衛の目には、それが蟻ありの歩みのやうにもどかしく思はれた。やつと二十人程の若者が、かけ上つて來た。彼等は、すぐ火を消しにかゝらうとする。五兵衛は大聲に言つた。

「うつちやつておけ。——大變だ。村中の人に来てもらふんだ。」

村中の人々は、追々集つて來た。五兵衛は、後から後

から上つて來る老幼男女を一人々々數へた。集つて來た人々は、もえてゐる稻むらと五兵衛の顔とを、代る／＼見くらべた。

其の時、五兵衛はカーぱいの聲で叫んだ。

「見ろ。やつて來たぞ。」

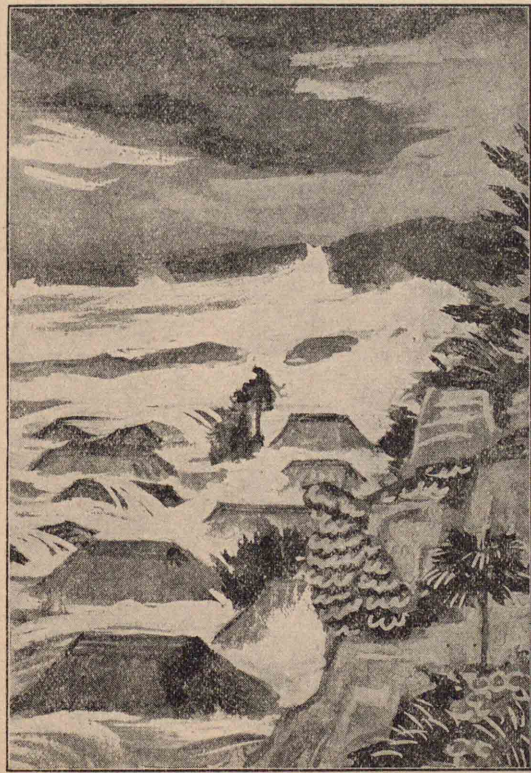
たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠く海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。其の線は見る／＼太くなつた。廣くなつた。非常な速さで押寄せて來た。

「津波だ。」



と、誰かが叫んだ。海水が、絶壁のやうに目の前に迫つたと思ふと、山がのしかゝつて来たやうな重さと、百雷の一時に落ちたやうなとゞろきを以て、陸にぶつかつた。人々は、我を忘れて後へ飛びのいた。雲のやうに山手へ突進して来た水煙の外は、一時何物も見えなかつた。

人々は、自分等



の村の上を荒狂つて通る白い恐しい海を見た。二度三度、村の上を海は進み又退いた。

高臺では、しばらく何の話し聲もなかつた。一同は、波に急ぐり取られてあとかたもなくなつた村を、たゞあきれて見下してゐた。

稲むらの火は、風にあふられて又もえ上り、夕やみに包まれたあたりを明かるくした。始めて我にかへつた村人は、此の火によつて救はれたのだと氣がつくと、無言のまま、五兵衛の前にひざまづいてしまつた。



鮮田舎

第十一 朝鮮の田舎

(一) 秋

秋の空は實に高い。さうして色が深い。紺青の大空には晝の月が淡く出て、日は西に傾きかけてゐる。もろこしの葉をかさ／＼と秋風がゆする。

萩 秋の日をまともに受けた駐在所の庭で、一郎と貞童が遊んでゐる。貞童が萩のはうきでとんぼを追ひかけると、とんぼはすいとそれて、豆畠の方へ飛んで行つてしまつた。



やないか。」

「さう言はないと取れないよ。」

「とんぼ、とんぼ、あつちへ行けば地獄、こつちへ来れば極樂。」

貞童が歌ふと、一郎は「反對だ。君、とんぼを取るんだらう。」  
「うん、取るんだ。」  
では、こつちへ来れば地獄ぢ



二人は笑ひながら、豆腐の方へ走つて行く。豆がかさかさ音を立てる。

葉

どの家も温突をんどうをたき出したと見えて、紫色の煙が村中にたゞよつてゐる。其の煙の中に、ばかりばかり藁屋根わらが浮いて見える。まだ西日を受けてゐる屋根に、干してあるたうがらしが真赤だ。高くのびたポプラや茂つたアカシヤは、あざやかな黄色。櫻も紅葉して、みんな赤い夕日を受けてゐる。

一郎と貞童は、とんぼ取を止めて歸つて來た。「生かしておかうや。」

貞童は、豆の葉の柄えで造つた蟲かごに、とんぼを入れた。

「動かないよ。」

二人は、じつととんぼを見てゐる。市場歸りの朝鮮馬が、けたましく鳴いて過ぎる。夕の光をかすかに残した大空を、雁がんの群が渡つてゐる。

「雁、雁、わたれ。」

大きな雁は先に、  
小さな雁は後に、  
仲よくわたれ。」



一郎と貞童が、空に向かって歌った。

(二) 冬の夜

夜になつても薄青い空、其の空に、星が一ぱい氷り  
ついたやうにして、またゝいて  
ある。井戸端のうるしの木が、  
ぬうつと立つてゐる。



ぽこん、ぽこんといふ音が通  
つて行く。水汲みに来た女の  
頭の上の水がめが、ゆれて鳴る  
音だ。寒さが、骨身にしみてし

いんとする。

温突部屋べやの中では、薄暗いランプの火が心細くゆ  
れてゐる。おぢいさんが、孫を寝つかせようとして  
話をしてゐる。

「此の村に、古いけやきの木があるだらう。魔物まものが、

あのけやきにあた。」

「それがどうしたの。」

「そばを通る子供に、いたづらをした。」

「どうして、いたづらをしたの。」

「いたづら好きの魔物だからさ。」



息子

「どんないたづらをしたの。」

おぢいさんは、口をむにやむにやさせて、中々答へない。ふくろふの鳴く聲が聞える。

別な部屋では、息子を相手に

に父がかますを織つてゐる。

「これが五枚目だつたな。」

「はい、五枚目です。」

「どうだ、六枚織れるか。」

「織りませう、おとうさん。」

息子が元氣に答へる。話し



ながらも、二人の手が器用に動く。そばでは、母が娘を相手にきぬたを打つてゐる。  
「これだけ、たゝいてしまはう。」  
母が棒を取つて、とんと調子を取つた。とんからとんから、調子のよい音が流れ出した。

第十二 水彩畫

此の夏かいた

水彩畫、

今出して見て



夏こひし。

青葉のそよぎ、

日の光、

カンナの花の

血の色よ。

町のいとこが

歸る時、

あれ程ほしいと

夢

言つたのを、

ついやらないで、

其のまゝに

別れたことも

思はれる。

ふと息がき出す

夏の夢、

外はちらく



雪が降る。

第十三 久田船長

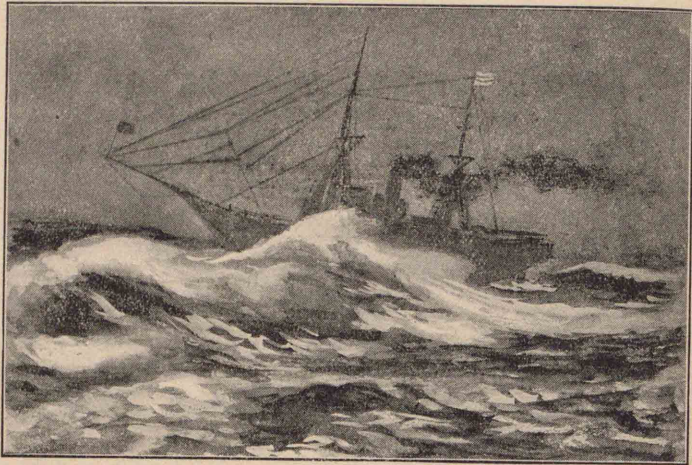
青森函館間の連絡船東海丸は、多数の船客を乗せ、郵便物・貨物を積んで、夜半に青森港を出航した。大分しげ模様であつた。明治三十六年十月二十八日のことである。

便郵 霧 吹雪

津軽海峡特有の濃霧が、海上をおほつてゐた。波も次第に高くなつて行つた。しかも雨は雪に變じ、それが吹雪となつて、あたりを吹きまくつた。暗さ

白

此方



は暗し、其の上濃霧と吹雪では、全く黑白も辨じない。東海丸はしきりに汽笛を鳴らし、警戒しつゝ、進行を續けた。かうして、翌朝四時頃には、渡島半島矢越岬の沖合にさしかゝつてゐた。

すぐそこに、此方をさして突進して来る船があつた。それは、室蘭で石炭を積んで、ウラヂボストックへ廻



航するロシヤの汽船であつた。

危 首響 浸

東海丸の船長久田佐助は、眼前に迫る此の危急をさけるのに全力を盡くしたが、しかしもうおそかつた。忽ち一大音響と共に、ロシヤ汽船の船首は、東海丸の船腹を破つてしまつた。海水は、ようしやなく浸入する。東海丸の船體は、極度に傾いた。

すは一大事。久田船長は、早速乗組員に命じて部署につかせた。五隻のボートは下された。彼は、わめき叫ぶ船客をなだめつゝ、片端からボートに分乗せしめた。此の間にも、東海丸は刻々と沈んで行つ

確

た。

船客も船員も、すべてボートに乗つた。船長は幾度か確めるやうに、

「みんな乗つたか。」

「乗りました。」

「一人も残つてゐないな。」

「残つてをりません。」

残つたのは、たゞ船長一人であつた。

「船長、早くボートへ乗つて下さい。」

だが、返事はなかつた。一體何をしてゐるのだらう。



船員の一人は、たまらなくなつて、はせつけた。

「船長、早くボートへ。」

しかし、船長は、船橋の欄干らんかんに身を寄せて動かうとしなかつた。見れば彼の體は、旗のひもで、しつかと欄干に結び附けられてゐる。沈み行く船と運命を共にしようとする覺悟かくごなのだ。

「船長、私も一しよにお供いたします。」

それは、全く船員の感激かんげきの叫びであつた。

船長は嚴かに答へた。

「船と運命を共にするのは、船長の義務だ。お前は

嚴

悲|

早く逃げろ。一人でも多く助つてくれるのが、私に對するお前たちの務ではないか。」

悲痛なしかも威嚴のある聲に、船員は思はずはつとした。彼は、すごくとして最後のボートに身をゆだねた。

東海丸からは引切りなしに汽笛が高鳴つて、暗い海の上を壓あつした。聞く人々は全く斷腸だんちやうの思であつた。やがて、其の音は聞えなくなつた。東海丸は沈没したのである、最後の瞬間しゆんかんまで、非常汽笛を鳴らし續けた久田船長もろ共に。

沈|

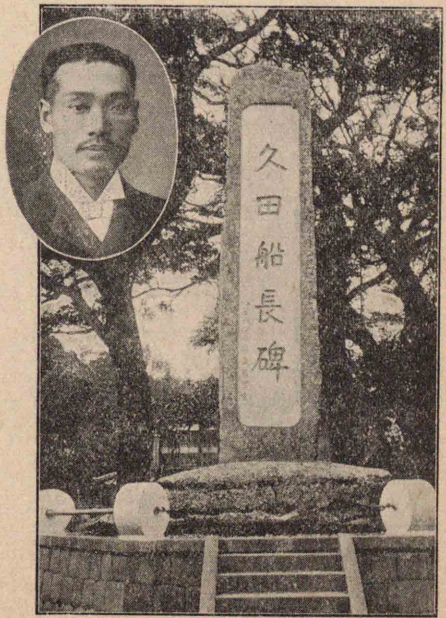


暗夜と荒天の海上に、五隻のボートは木の葉のやうに動揺した。中には波にのまれてしまつたのもある。しかし、

乗客船員の過半は、からうじて助ることが出来た。

四十歳を一期として、従容死についた船長久田佐助の高潔な心事は、忽ち世に傳へられ、日本全國の人をして涙をしばらせた。

「船長たる者は、萬一の場合、決死の覺悟がなくては



尋國十

ならぬ。百人中九十九人まで助れば、或は自分も生きてゐるかも知れぬが、さもなければ歸らぬものと思へ。」

とは、久田船長がかねてから其の妻に言聞かせてゐた言葉であつた。だから、東海丸遭難第一の電報を手にした時、妻は早くも夫の死を察し、見舞の客に對しても、あへて取りみだした様子を見せなかつた。人々は此の事を聞いて、今更のやうに久田船長のりつぱな心掛に感動すると共に、夫をはづかしめぬ此の妻の態度をほめたゝへた。



第十四 母の力

元治元年九月二十五日の夜である。

あと四年で、明治維新の幕が切つて落されようといふ時だ。天下の雲行はほとんど息苦しいまでに切迫してゐる。

周防の山口では、今日も毛利侯の御前會議で、氣銳の井上聞多が反對黨を向かふに廻して、幕府に對する武備を主張した。其の堂々たる議論に、反對黨はぐうの音も出なかつた。

張備 銳 迫

吉男

其の夜である。

下男淺吉の提燈にみちびかれながら、聞多が山口の町から湯田の自宅に歸る途中、暗やみの中に待受けてゐる怪漢があつた。

「誰だ、君は。」

と、それがだしぬけに聲をかける。

「井上聞多。」と答へるが早い。後に立つた今一人の怪漢が、いきなり聞多の兩足をつかんで、前へのめらせた。すかさず第三の男が、大刀を振るつて聞多の背中を真二つ。



際

顔

血量

それを不思議にも、聞多の差ししてみた刀が防いだ。うつ向けになつた際、刀が背中へ廻つてみたのである。それでも、脊骨せぼねに深くくひ込む重傷であつた。氣丈にも聞多は立上つて、刀を抜かうとした。すると、一刀が又後頭部を見舞つた。更に、前から顔面を深く切込んだ。

ほとんど無意識むいしきに、彼は其の場をうまくのがれた。あたりは眞のやみである。怪漢等はなほも彼を探したが、もうどこにも見つからなかつた。

多量の出血に、しばらくは氣を失つてみた聞多が、

ふと見廻すと、そこはいも畠の中であつた。體中が、なぐりつけられるやうに痛む。何よりも、のどが乾いてたまらない。

向かふに火が見える。彼は、そこまではつて行つた。それは農家の燈火であつた。

「お、井上の若旦那たん様。どうして又これは。」

驚く農夫に、やつと手まねで水を飲ませてもらつた。聞多は、やがて彼等の手で自宅へ運ばれた。

浅吉の急報によつて、聞多の兄五郎三郎は、押取刀で其の場へかけつけたが、もう何も後の祭、どこにも



人影はなかつた。弟の姿も見えぬ。再び家につ  
て返すと、今農夫たちにかつがれて歸つた弟のあさ  
ましい姿、驚き悲しむ母親。

とりあへず、醫者いしゃが二人來た。しかし、満身は血だ  
らけ、泥だらけである。醫者は、ばう然としてほとん  
ど手の下しやうも知らぬ。

聞多はもう蟲の息であつた。母、兄、醫者の顔も、ば  
つとして見分けがつかぬ。からうじて一口、

「兄上。」

とかすかに言つた。兄の目は、涙で一ぱいである。

「お、聞多。しつかりせい。敵は誰だ。何人ゐた  
か。」

尋ねられても、聞多には答へる力がなかつた。たゞ  
手まねが言ふ。

「介錯かいしやく頼む。」

慈

兄は涙ながらにうなづいた。どうせ助らぬ弟、頼み  
にまかせて一思ひに死なせてやるのが、せめてもの  
慈悲だ。決然として兄は刀を抜いた。

「待つておくれ。」

それは、しぼるやうな母の聲である。母の手は、堅く



袖

五郎三郎の袖にすがつてゐた。

「待つておくれ。お醫者もこゝにゐられる。たとひ治療ちれうのかひはないにしても、出来るだけの手を盡くさないでは、此の母の心がすみません。」

「母上、かうなつては是非ぜひもございませぬ。聞多の體には、もう一滴の血も残つてゐませぬぞ。手當をしても、たゞ苦しめるばかり。さあ、お放し下さい。」

兄は刀を振上げた。

其の時早く、母親は、血だらけの聞多の體をひしと

友

抱きしめた。

「さあ、切るなら、此の母もろ共に切つておくれ。」

此の子をどこまでも助けようとする母の一念には、りつめた兄の心もゆるんでしまった。

聞多の友人、所郁いくだ太郎たらうが其の場へかけつけた。彼は蘭方醫らんぱういであつた。

彼は、刀の下緒さげをたすきに掛け、かひぐしく身支度をしてから、焼酎せうちゆうで血だらけの傷を洗ひ、有合はせの小さい疊針で傷口を縫始めた。聞多は、痛みも感じないかのやうに、こんくと眠つてゐる。他の醫



必



者二人も、何くれと此の手術を手  
傳つた。かうして、六箇所の大傷  
が次々に縫合はされた。

それから幾十日、母の必死の看  
護と、醫者の手當によつて、不思議にも一命を取止  
めた聞多が、當時の母の慈愛の態度を聞くや、病床に  
さめぐくと泣いた。

「聞多、三十歳の壯年に及んで、何一つ孝行も盡くさ  
ないのに、今母上の力によつて、萬死に一生を得よ  
うとは。」

尋國十

榮



程なく世は明治となつた。昔  
の聞多は井上馨かざるとして、朝堂に時  
めく人となつた。従一位じゆいちゐ侯爵に  
のぼり、八十一歳の光榮ある長壽ちやうじゆ  
を終るまで、功績は一世に高く、君寵くんちやうはすこぶる厚か  
つた。

それにしても、此の母の慈愛によらなかつたら、三  
十歳の井上聞多は、山口在に非命の最期さいごを遂げたで  
あらう。まことにありがたく尊いのは、此の母の力  
であつた。



第十五 水師營の會見

開

旅順開城約成りて、  
敵の將軍ステツセル、  
乃木大將と會見の  
所はいづこ、水師營。

庭に一本なつめの木、  
彈丸あともいちじるく、  
くづれ残れる民屋に、

今ぞ相見る二將軍。



乃木大將はおごそかに、



彼

御惠深き大君の  
 大みことのり傳ふれば、  
 彼かしくみて謝しまつる。  
 昨日の敵は今日の友、  
 語る言葉もうちとけて、  
 我はたゝへつ、彼の防備  
 彼はたゝへつ、我が武勇。  
 かたち正して言出でぬ、

閣

「此の方面の戦闘に、  
 二子をうしなひ給ひつる  
 閣下の心如何にぞ。」と。  
 「二人の我が子それぐに、  
 死所を得たるを喜べり。  
 これぞ武門の面目。」と。  
 大將答力あり。  
 兩將晝食ひるげ共にして、



なほも盡きせぬ物語。

「我に愛する良馬あり。

今日の記念に獻けんずべし。」

「厚意謝するに餘りあり。

軍のおきてにしたがひて、

他日我が手に受領せば、

長くいたはり養はん。」

「さらば」と、握手あくしゆねんごろに、

受

別れて行くや右左。

砲音つ、おと絶えし砲臺に、

ひらめき立てり、日の御旗。

第十六 張良と韓かんしん信

張良、或時橋上にて白髪の一老人に會ふ。老人靴

を橋下に落し、張良に向かひて、

「拾ひ來れ。」

と言ふ。張良其の無禮を怒りしが、老人なればと思

ひ返し、靴を拾ひ來りて捧ぐ。老人足にてこれを受

髪



足

け、打笑ひて行過ぎしが、やがて立ちもどり、

「汝は教ふるに足る者なり。

今日より五日目の朝、こゝ

に來りて我を待て。」

と言ひすてて去れり。

五日目の朝、張良早く行け

ば、老人すでに來りて待てり。

叱していはく、

「長者と約しながら、おくるゝは何事ぞ。今日より



辛國十  
辛國十

束

五日目の朝早く來れ。」

と。

約束の日、曉あかつきに起きて行くに、又老人におくれたり。

老人大いに怒り、

「五日目の朝また來れ。」

と言ふ。

此の度こそはと、夜半より起きて橋上に行けば、し

ばらくありて老人來り、一卷の書を取り出して張良に

與へ、

「これを學ばば、帝王の師となることを得ん。」



好 頼 夕



いはく、

「汝、身體長大にして、好んで劔を帶ぶ。若し勇氣あ

とて、いづこともなく立去りたり。聞き見れば、世にも得がたき兵書なり。張良大いに喜びて、朝夕これを読み、遂に兵法に精通せり。

韓信、長劔を帯びて市中を行く。無頼の少年等、口々にのしりて止まず。其の中の一人

然

らば、我を殺せ。然らずんば、我がまたをくゞれ。」  
と。韓信しばらく其の顔をうちまもりあたりしが、  
やがて腹ばひてまたをくゞる。見る者あざけり笑  
はざるはなし。

後、張良、韓信共に漢かんの高祖に仕へ、張良は内にはか  
りごことをめぐらし、韓信は外に兵を用ひて、何れも大  
功を立て、名を後世に輝かせり。

第十七 雪の山

(一)



正暦五年十二月十日過ぎの或日、京都では、雪しやうれきがかなり降りました。

側 休  
一條天皇のお后みくらは、其の頃、御休養のため、宮中から下つて或御殿にいらつしやいましたが、珍しく雪が降つたので、其の日、六七人の官女たちと、お庭の雪を眺めていらつしやいました。清少納言せいせうなごんもお側近く仕へてゐました。

廣いお庭では、大勢の男たちが、雪をかき集めては、それを一箇所に積上げてゐます。見る／＼それが高くなつて、見上げる程の雪の山になりました。

お后は、官女たちに、

「此の雪の山は何時まで残つてゐるでせう。」

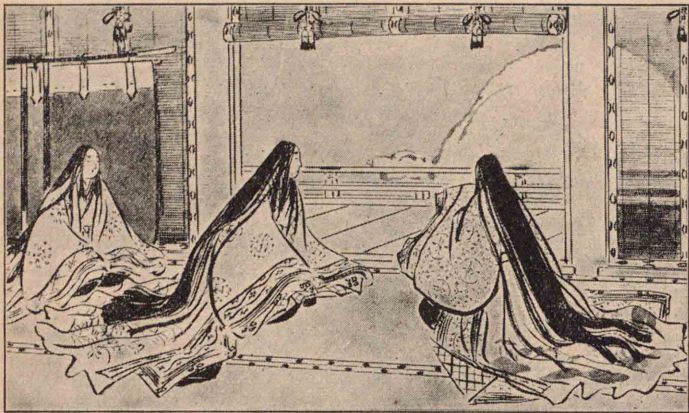
と仰せになりました。

皆は、ちよつと顔を見合はせましたが、

「十二三日ぐらゐはございませう。」

と、一人の官女が申しますと、

「其のくらゐと、私も思ひます。」  
「私もさうと思ひます。」





と、次々にお答へ申し上げました。

お后は、此の時まで何も言はずにだまつてゐる清少納言に、

「そなたは、どう思ひます。」

とお尋ねになりました。

「正月の十五日まではあらうかと存じます。」

これが、清少納言のお答へ申し上げた言葉でした。すると、一座が少し動揺どうえうし始めました。

「そんなに長くあるでせうか。」

「いくら長くても、今年の中には、きつと消えるでせ

う。」

「さうですとも。此の雪が、大晦日おほみそかまであらうなどとは、とても思へません。」

官女たちは、口々に言出しました。さう言はれてみると、清少納言も、少し言方が大きかつたかしら。と心の中に思ひましたが、負けぎらひの彼女は、官女たちに、

「私は、どうしても正月の十五日までであると思ひます。」

と言つて動きません。かういふ時、清少納言は、何時



もはつきりとした態度たゝどの女でした。

(二)

十二月の二十日近くなつても、雪の山は、皆が思つた程小さくはなりません。少しばかり背が低くなつたくらゐです。

清少納言は嬉しくなつて、心の中に、「加賀白山の觀世音様どうぞ、此の雪をお消しになりませぬやうに。」と一心に祈りました。

大晦日近くなると、大分小さくはなりましたが、それでも雪の山は、どうくゝ年の瀬を無事に越してし

まひました。

(三)

元日に雪が降りました。好い具合だと、清少納言は思ひました。すると、お後の仰で、

「今日降つた雪だけは取除くやうに。」

とのこと。男たちが、雪かきで、ようしやなく新しい雪を取捨ててしまひました。

(四)

正月の三日に、お后は宮中へお歸りになることになりました。

除



雪の山は所々黒くなつて、みすばらしい姿をしています。

「これが十五日まであるものですか。」

「とても七日までも持ちませんね。」

など、官女たちがお互に言つてゐます。清少納言は、同じ事なら、十五日までこゝにゐて、見届けたいものだと思ひましたが、自分も、お后のお供をして行かなければなりません。彼女は、お庭師を呼んで、「此の雪を消さないやうに、人が踏散らしたりしないやうに、嚴重に番をして下さい。」十五日まで雪

が消えないであら、きつと御褒美はうびを上げますから。

と頼みました。御褒美と聞いて、お庭師はにこくしながら、

「ようございます。必ず氣をつけます。」

と答へました。

(五)

七日に、清少納言は、正月のお暇を頂いて、宮中から自分の家へ下りました。

十日には、まだ雪が五六尺四方は残つてゐます。」と



いふ知らせです。ではもう大丈夫だと思つてゐる矢先、十三日の夜、あいにく大雨が降出しました。清少納言は、其の夜一夜眠られませんでした。夜が明け、けるのを待ちかねて、尋ねにやりますと、

「ざぶとん程残つてゐます。明日までは大丈夫持ちます。」

といふお庭師の返事でした。「まあ、よかつた。」と、清少納言は思ひました。

(六)

いよく十五日の朝です。

清少納言は、まだ暗い中に、使の者に大きなお盆ぼんを持たせて、

「これに、雪の白い所だけ山のやうに盛つて、持つて来ておくれ。」

と言ひふくめてやりました。さうして、其の間に歌を作つて紙にした、め、雪にそへてお后にお目にかけようと、清少納言は、使の歸るのを、首を長くして待つてゐました。

使の者が歸つて來ました。

「どうしたとか、すつかり無くなつてゐました。」



これが使の言葉です。  
「でも、昨日あんなに残つてゐて、大丈夫のはずだつたのに。」

「昨日夕方まではちやんとありました。それが今朝はございませぬ。御褒美が頂けないと言つて、お庭師が残念がつてゐました。」

もう歌どころではありません。そこへお后からのお使がありました。

「雪は今日までありましたか。」

といふお尋ねです。すつかり失望した清少納言は、

「昨日の夕方までは、確にございました。昨夜、誰かいたづらをしたとみえて、今朝はすつかり無くなつてゐたさうでございます。」  
残念ながら、かう御返事申し上げる外はありませんでした。

(七)

正月の二十日、清少納言は宮中へ参りました。お后にお目通をして、

「折角使をやりましたのに、雪はすつかり無くなつてゐました。」と、其の使が、お盆を帽子のやうにかぶ



獻(献)

つて歸つて來ました時、私はほんたうに残念でございました。お盆に白い雪を盛つて、つたなくとも私の歌をそへまして、献上致したいと存じてをりましたのに。」

と申し上げますと、お后はお笑ひになりました。官女たちも皆笑ひました。

「それ程、そなたが思ひ込んでゐたのに、實は十四日の夜、人をやつて雪を取捨てさせたのです。餘り勝過ぎて、人にうらまれては、かはいさうですから。」と、お后が仰せになりました。清少納言ははつとし

ました。

「しかし、雪はまだたくさん残つてゐたといふから、何と言つてもそなたがりつばに勝つたのです。みかどが此の事を聞き召して、よくも言ひあてたものだ。」と、殿上人たちにおほめになつていらつしやつたさうです。さあ、そなたの其の歌といふのが聞きたいものですね。」

と、お后の仰です。

官女たちも言ひました。

「ぜひ、其の歌をお聞かせ下さい。」



たつた今の今まで、残念とばかり思ひつめてゐた清少納言の心は、すっかり明かなくなりました。それどころか、自分のやうなものをこれ程にまで思つて頂けると思ふと、もつたいなくて、泣きたいやうな氣さへしました。

「今さら、どうして私のつたない歌をお目にかけることが出来ませう。どうぞ、それだけはお許し下さいませ。」

さう申し上げながらも、清少納言は、たゞ有難いと思ふ心で胸が一ぱいでした。

氷

第十八 南極海に鯨を追ふ

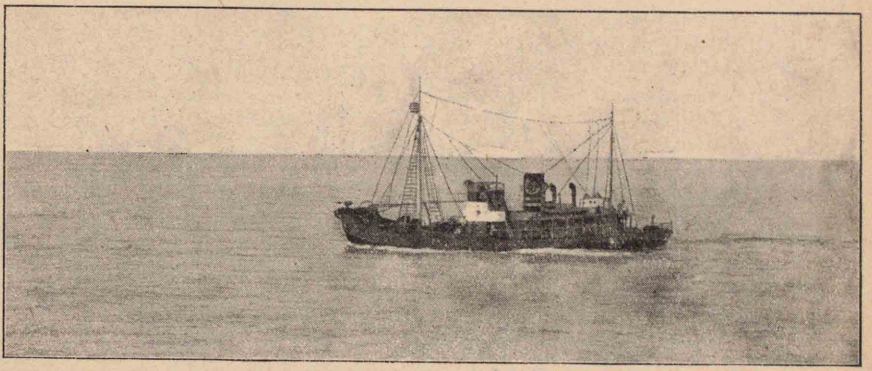
灰色の雪雲が低くたれてゐる。恐らく遠い所は晴れてゐるのであらう、地平線の上だけが明かるい。大小様々の氷山が、島のやうに、あちらこちらに浮いてゐる海上を、母船から離れた我が捕鯨船は、今全速力で走つてゐる。はるか彼方に、代るぐゞ背を出しては、潮を吹く二頭の大きな白長須鯨しろながすを見つけたからである。

「取舵。」

舵



舵 構



帆柱の上の見張から、水夫長が叫んだ。

「取舵。」

船橋で舵を取つてみた舵手が、それに應じる。

船は軽く左方へ曲り、鯨の逃道に對してイの字なりに迫つて行く。砲手は、捕鯨砲の安全かぎをはずして身構へ、砲身を二三回左右に振つてみた。さうして、鯨の残した水の

輪を注意深く見まもつてゐる。

「一ぱい、一ぱい。」

俄然砲手が、後を振向いて力強くどなつた。一ぱいの速力を出せといふのである。船長が、すぐに、機関室に通じてある傳聲管に向かつて、同じ事を叫ぶ。見張から指圖する聲は次第にしげくなり、それを復唱する舵手の顔も引きしまつて来る。いよく發砲の機會が近づいたのだ。

「バツ」といふ音を立てて鯨の吹上げる水煙が、船の上にも霧のやうに降りかゝる。

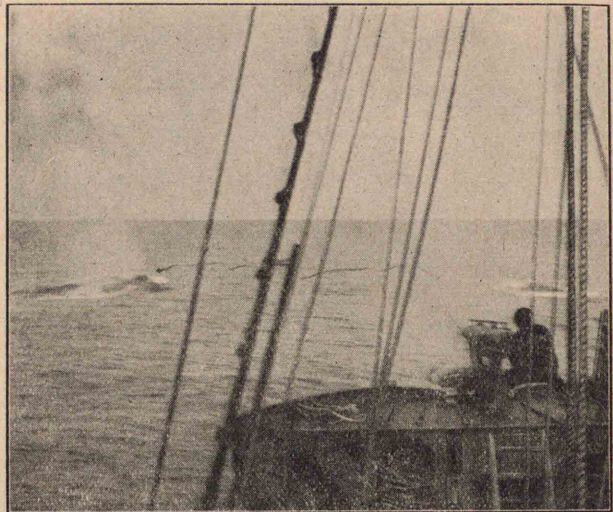


もう百米とは離れてゐない。全船員の注意は、海面に出たり沈んだりする鯨の上を集る。大きい氷山の影も目にはいらない。全速力を出してゐても、自分の船は止つてゐるとしか思へない。十数名の船員の心が、船と一つになつて鯨に追附かうとしてゐるのだ。

「用意」

見張から落着いた聲が響きわたる。砲手は兩足を踏張り、捕鯨砲を下腹の邊に構へて、じつと鉛色なまりの水面をみつめる。やがて五十米程前方の水が泉のや

巨 瞬 網



うに盛上り、白い水煙が上つたと見る間に、鯨は其の巨體を浮上らせた。さうして、背びれのあたりを水面に現し、今や沈まうとする瞬間、こゝぞと砲手は引金を引いた。すさまじい響と共にもりが

飛び、網は波打つてくり出された。

「命中」

船長が傳聲管に向かつて叫ぶ。



裂

鯨はものすごい勢で水中深く沈んだ。船の機関はびたりと止る。全員は鳴りをひそめる。「ぶすり」と押しつぶすやうな音がした。鯨の体内深くくひ込んだもりの爆弾が、破裂したのだ。もりに附けた綱は、ぐんぐんのびて行く。数名の水夫が急いで船首へかけつけた。船長も舵手も、船首へ下りて行く。無線通信士が代つて舵を取る。總動員である。砲手は、へさきにうつ伏せになり、綱の行手を見極めてある。

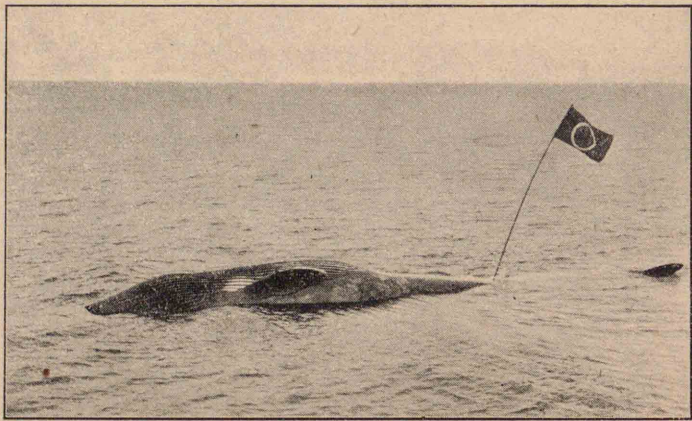
準

船長は水夫等を指揮して、二番もりの準備を進め

歡

る。今まで勢よく引出されてみた綱がやゝゆるんで、鯨は二百米ばかり先に浮上つた。再び船は鯨のあとを追ふ。三四十米まで近づいた時、砲手は二番もりを打込んだ。鯨は又水にもぐつたが、もう浮上つて来ない。思はず歡呼の聲が上る。

綱は烈しく巻かれる。やがて、三十米もある白長





須鯨が、全く息絶えて、小山のやうな體を水面に横たへる。引寄せた鯨は、腹部に送氣管で空氣を送つて沈まないやうにし、目じるしの旗を胴に立てて、其の場に浮かしておく。

行方

見張では、水夫長が今一頭の鯨の行方を見まもつてゐる。

船は再び全速力で走り出した。

第十九 Panama 運河

世界地圖を見て、誰でもちよつと不思議に思ふの

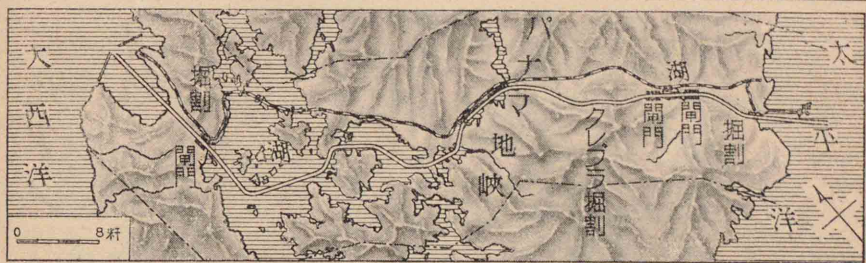
峽

は、北アメリカと南アメリカの二大陸が、まるで紐ひものやうに細長い地峽でつながつてゐることです。ちやうど飴あめでも引きのばした時のやうに、切れさうで切れないといつたかつかうです。

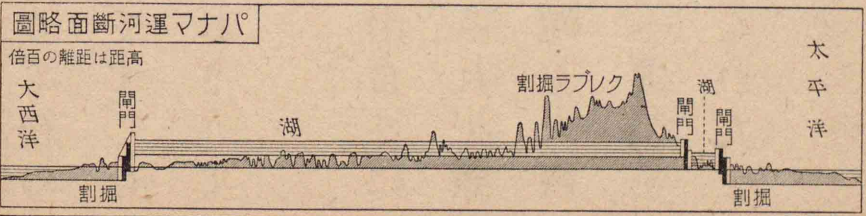
若しあそこが少しでも切れてゐたら、自由自在に船も通れるでせうが、如何に細いにしてもそれが續いてゐたのでは、はるく南アメリカの南端を大廻りしなければなりません。だから、あそこへ運河を作らうといふことは、何百年も前から考へられたことでした。



畫



ところで、あの細長い地峽は、地圖で見れば何でもないうやうに見えながら、實は兩大陸をつなぐ火山地帯で、至る所岩だらけ山だらけなのです。かうした場所を掘割るといふことは、並大ていの仕事ではありません。計畫は何べんか立てられ、工事も失敗をくりかへしましたが、しかしとうとう出来上つ



て、今では大きな商船でも軍艦でも、通り抜けられるやうになりました。世界に有名なパナマ運河といふのがそれなのです。

しかし、いくら人間や機械の力が進んだにしても、此の岩だらけ、山だらけの土地を掘割つて、海面と同じ高さに水を通すことは、中々出来さうにありません。だから、パナマ運河は、すこぶる變つた仕組に作られなければならなかつたのです。

先づ此の地方を流れる川の水を、大きな高い土手を築いてせき止めました。すると、水は陸上にた

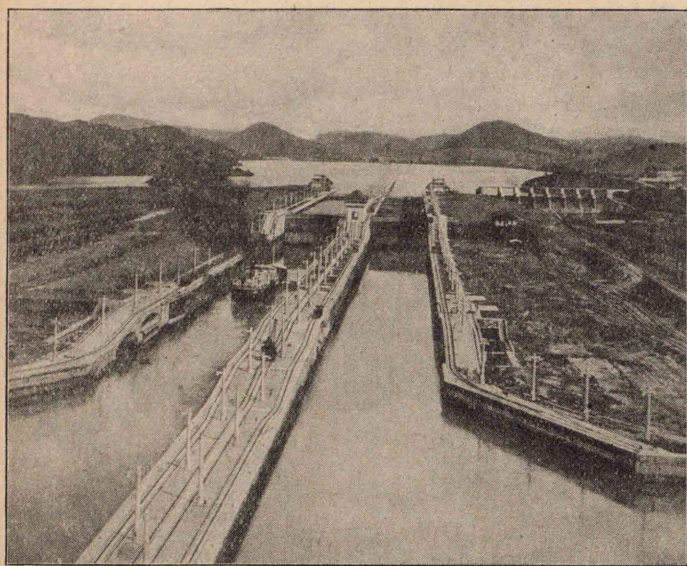


絡 構

へられて、二つの湖になりました。さて、此の湖へ、兩方の海から掘割をつけて、ちやうど團子の串刺くしざしのやうに、運河を通さうといふのですが、陸上に作った湖のことですから、其の水面は、海から來る掘割の水面よりも、ぐつと高いわけです。そこで、此の高さの違ふ水面をどういふ風に連絡するか、こゝがバナマ運河の構造の一番おもしろい所です。

昔から、川の流の急な所を、舟を通す場合、かふもん閘門といふものを作りました。閘門といふのは、川の上手と下手と、二箇所に作った水門です。今、舟が川下から

互 樂



上るとします。すると、上手の水門を閉ぢ、下手の水門を開きます。さうして、舟が下手の水門を通ると、

今度は下手を閉ぢ、上手を開いて舟を通します。かういふ風に、二つの水門を交互に開いたり閉ぢたりすると、閘門内の水面は、其の都度高くなつたり低くなつたりして、舟は樂々と通つて行けるのです。



パナマ運河には、これと同じ理くつの閘門を、大仕掛に、しかも幾段にも作つたのです。

今、太平洋の方から此の運河へはいるとしませう。最初はたゞ幅の廣い掘割ですが、約十三軒も行くと、向かふに大きな水門が現れます。これが第一の閘門の入口です。其の水門をくゞると、門はやがてとぎされます。上手の水門は初から閉ぢてありますから、船は大きな箱の中へはいつたと同然ですが、其の箱が長さ約三百米、幅約三十四米もあるのですから、今日の大ていの船は、ちやんと中にをさまります。

すると、箱の底に仕掛けてある水道から水が湧出て、船は次第に高くせり上げられて行きます。今度は上手の水門が開き、船は水路に沿うて走る機關車に引かれながら、靜かに奥へ進みます。かうして、第一の閘門を通つて第二の閘門に入り、こゝでも又同様の手續をくりかへして、更に一段と高くせり上げられるのです。

第二の閘門を出ると前は湖ですが、これはさう大きいものではありません。湖上を渡つて、第三の閘門に着きます。かうして前後三段の閘門を通過す



聳

る間に、船は海面から二十六米も上るのです。  
 それから先がクレブラの掘割です。つまり地峽  
 の脊骨せぼねに當る高い岩山を切通した所で、幅が底の所  
 で九十米、兩岸には絶壁がそばだち、其の長さが十五  
 米も續くすばらしい大工事です。そこを通過する  
 と先は又湖ですが、これは日本の霞浦かすみがうらの二倍もあら  
 うといふ大ききさで、しかも人間の力で出来た湖と聞  
 くと、全く驚かされます。従つて、今、湖上に浮かぶ島  
 島は、其の昔、陸に聳えてゐた山であつたわけです。  
 湖が盡きると、そこに三段の閘門があります。其

往

の一つくを、今度は前と反對の手續で降つて行く  
 のです。かうして、船は再び海と同じ高さの水面に  
 浮かびます。後はもう何のわけもありません。た  
 だ一直線に掘割が續いて、其の果に大西洋が現れて  
 來るのです。  
 運河の長さは全體で約八十二米、十時間ばかりで  
 船は通過します。閘門はどれも二列に並んでゐま  
 すから、往く船と來る船と、同時に通ることが出来ま  
 す。

此の運河を作ること成功したのは、アメリカ合が



衆國しゅうこくでした。それがために、毎日三萬何千人の人々が働き續けて、十年といふ長い月日がかかりました。あらゆる人間のちよをしばり、機械といふ機械を使つて、熱帯の密林を開き、氣ちがひのやうにあふれる川を制し、頑固くわんこな岩山を切開いて、巧みに此の文明的大工事をしとげたのです。出來上つたのは、我が大正三年八月のことでした。

しかし、此の大工事の裏には、もつと偉大ゐだいな仕事がありました。それは、目に見えぬ熱帯の傳染病との戦でした。もと此の地方に流行したマラリアと黄

## 黄 染 制 密

## 康 健 設

熱病が、かつては何萬といふ西洋人の命を奪つたこともあります。殊に、一度黄熱病にかつたが最後、人は熱にうなされ、黄色くなつて、ばたく死んで行きます。幸ひ、此の病氣のなかだちをするものが、蚊であることがわかつたので、水たまりを乾かし、みぞを埋め、水道を設け、下水を完全にし、道路を鋪装ほさうして、昔の不健康地を一變することに成功しました。若し此の仕事が進まなかつたら、よし何萬何十萬の人がこゝに送られて來ようとも、Panama運河は完成しなかつたかも知れません。



第二十 冬の月

さえぐくと

冬の月、

庭の面は

真晝の如し。

枯枝は

地に落ちて、

風寒み

かすかに震ふ。

我が影を

我が蹈めば、

道の石

さえて音あり。

見上ぐれば

たゞ真上、

天心に



月や、細し。

第二十一 國法と大慈悲

仇 亡

赤穂あかほの浪士らうし、大石内藏之助おおいしの内すけを始め四十餘人が、亡君浅野内匠頭あさのたくみのかみの仇きら、吉良上野介きらかうづけのすけを討つて、あつぱれば本望を遂げたといふので、江戸市中はすっかり興奮こうふんしてしまつた。

「感心な者だ。」それでこそほんたうの武士である。「まことに忠臣の鑑かたみ」

ほとんどあらゆるほめ言葉が、彼等に浴びせられた。

騷 罪 罪 名 預 助

件

しかし、徒黨たうたうを組んで天下を騷がすといふことは、重い罪である。彼等は罪人として、一先づ細川越中こまつちゆうの守かみ以下、四人の大名にお預けといふことになつた。

「お預けになつても、きつと其の中助命になるに違ひない。」

世間の人々は、誰もさう考へた。

將軍綱吉つなよしは、さすがに此の事件の始末に心を痛めた。先づ役人たちに評議ひやうぎをさせ、又學者の意見をも徴した。すると、

「彼等は、まことに忠義の者どもである。若しこれ



致

をお仕置にするといふことになれば、今後忠義を  
はげます道がないであらう。  
といふのが、多くの人々の一致した意見であつた。  
かうした天下の輿論よろんに對して、たゞ一人荻生徂徠おぎふそらい  
の言ふ所は違つてゐた。

違 騷 私 政

「亡君の仇を報いたのは、義には相違ないが、みだりに騷動を起したのは、結局私情けつきよを以て國法を破つたのである。これを許せば、國家の政治が成立たない。」

綱吉は、元來情に動かされない人ではないが、しか

し理非にも明かるい人であつた。再三再四考へた

結果

「切腹を申しつけよ。」

と命じた。

天下を騷がした者は、たとひ武士でも、普通ならば打首である。切腹といふのは、どこまでも武士の名譽めいを重んじた扱ひであつた。

だが、世間はすっかり失望してしまつた。

正月が過ぎて、二月にいよいよ切腹といふことがきまつた。細川越中守を始め、浪士を預つた大名も



残念とは思ひながら、かうなつては何ともしやうがない。それぐ準備に取りかゝつた。

二月一日に、りんのおうじのみやこうべん輪王寺宮公辦法親王が江戸城へお出でになつた。綱吉は、法親王に種々御物語をしたついでに、

「政治を行ふ身程つらいものはございませぬ。淺野内匠の家來の事、いろくお聞及びでございませうが、何とか助ける道はないかと思ひましたけれども、左様致しては政道が立ちませず、まことにせんない事でございます。」

と、如何にも心ありげに申し上げた。佛の慈悲によつて、助ける道でもあらばといふ下心であつたらう。すると法親王は、

「いや、御苦心の程お察し申します。」

と仰せられただけで、やがて御退出になつた。

此のうはさが世間にもれて、誰言ふとなく、

「法親王は、おえらいお方と承つてゐたのに、將軍家のなぞがお解けにならなかつたとは。」

と、歎ずる者が多かつた。

すると、又此の事が法親王のお耳にはいつた。法

解



衣

親王は左右の者に、  
 「あの話を、將軍から聞いた時程苦しい事はなかつた。もとより、將軍の心はよくわかつてゐた。自分とても、彼等を法衣の袖にくるんで助けたいのは山々であるが、それはかへつて彼等の心であるまい。散ればこそ、花は惜しまれるのだ。彼等をりつばに國法に従はせるのが、佛の大慈悲であると思つて、自分はわざと將軍のなぞも解かず、そのまま、退出したのである。」  
 と仰せられた。

票

元禄十六年二月四日、大石内藏之助等一味の者は、いさぎよく切腹して、名を後世に輝かした。

第二十二 開票の日

日曜日の午後である。

遠くでしきりに鈴の音、それと共に「號外」といふ呼聲が聞える。さうだと思ふと、僕はすぐ外へ出て見た。

勢よく新聞屋さんが来る。其の手から、ほとんどひつたくるやうにして受取つた號外は、



「市會議員當選者決定。」

といふ大活字の見出した。僕は急いで二階へ持つて行く。すると梯子段の上から、

「當選者決定だらう。」

と父の待ちかねた聲がする。

父は座にもどりながら、一わたり見て、

「ほう、大體うまいつたな。わしの豫想がほとんど當つてゐる。それにしても、山川さんは今度も又第一位か。千二百三十九とはすばらしい得票だな。」

豫

とひとり言のやうに言ふ。

「山川さんは、どうしてそんなに何時も第一位なんでせう。」

いや、全くえらいからさ。教養も高いし、第一自分一身を投出して、人のために盡くす人だ。市政上の意見もしつかりした實にえらい人だ。」

父の言葉は、ほとんど感歎の聲である。

「おとうさんも、山川さんに投票なすつたのでせう。」

「いや、それは言ふべきことではない。」

何でも教へてくれる父が、此の事になると、何時でも



舉

はねつけるやうにする。

父は少し改つた調子になつた。

道雄。選挙といふものはね、これと思ふりつばな  
人を自分できめて、自分で投票するものです。み  
だりに人に聞いたり、聞かれたり、いはんや人に頼  
まれたりしてはならないものです。そんな事を  
するやうでは、結局人情や欲けつきよくに目がくらんで、ほん  
たうにりつばな人物に投票するといふ精神に反  
することになる。これは大事なことだから、よく  
覚えておきなさい。」

欲

其の時、外から歸つた母が、二階へ上つて來た。

「たゞ今歸りました。」

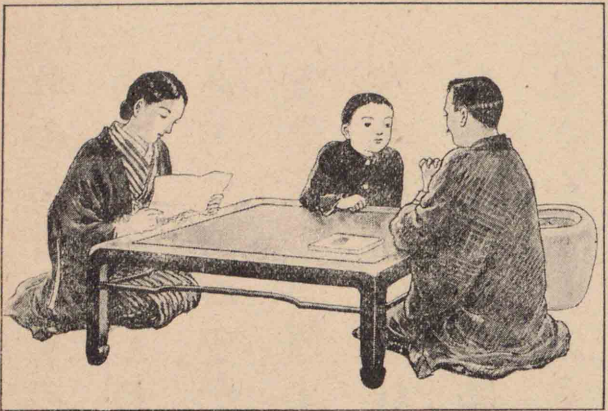
「やあ、お歸り。」

「お歸りなさい。」

と、僕も言つた。母は號外をちら  
と見て、

「まあ、當選の號外ですの。今度  
は、みんなりつばな方ばかりの  
やうですね。」

「うん。割合うまくいつてゐる。」





覺

「此の前とかくのうはさのあつた人は一人もはいつてあませんね。」

「あゝいふ連中が今度も出るやうでは選挙もおしまひだよ。何よりも棄権者が非常に少い。選挙人の自覺の現れたね。」

「あなたのやうに、旅行先からわざと歸つて投票なさる方もあるのですから。」

父はちよつと頭をかいて笑つた。

「いや、もつともつと感心なのがあつたよ。中風で、足もろくく立たないおぢいさんが、おばあさん

掲示

や、若い人たちに連れられて行つてゐるのを見て、わたしは思はず涙が出た。」

「ほんたうに感心ですね。」

「あゝいふ風に、みんなが選挙の義務といふことを強く感じれば、選挙は自然真剣になる。今度は其の真剣のたまものだ。」

夕方、父と町を散歩した時、掲示板に、當選者の名前が大きく書いて張つてあつた。當選した家では、定めて喜んでゐることであらう。

「選挙もうまくいった。何だか降續いた雨でも、す



つかり晴上つたやうな氣がする。  
と父がひとり言のやうに言つた。

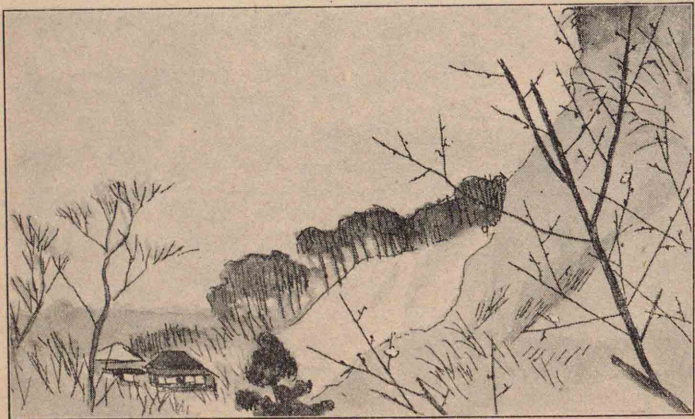
第二十三 春浅し

沈黙ちんもくの冬は去れり。しかも春なほ甚だ浅し。  
霜はとく消えて、表面のみかさくと乾ける地面  
より、早くも水仙ヒヤシンスの芽の出でたるを見る。  
其のみづくしき緑よ。ばらかへ楓等の芽も、少しく紅  
の色を増せり。

空はなほ冬と異ならず。さえたる青空に、小さく

雲 清 未 梅 衰

斷續だんぞくせる白雲おもむろに西より東に向かひて移動  
す。風寒く、天地清明にして靜かなり。時に、大工の  
振るふ槌つちの音の遠く響くを聞く。  
梅は未だ咲かず。蕾つぼみおしなべ  
て固し。されど、南を受けたる崖がけ  
下など、たまくと白梅の數輪咲き  
そめたるを見る。  
冬の衰へはすでにあとを絶て  
り。新鮮の氣天地にひそむ。  
朝夕立ちこむるうすもやに、う





た、春のかすみを思ふこと切なり。

第二十四 熊野紀行

那智

那智驛より、自動車を驅つて那智山に向かふ。山腹に車をすて、石段の幾曲折をあへぎあへぎ上れば、白衣の遍路御詠歌を唱へつゝ下り來るに會ふ。

熊野那智神社に參拜す。後に山を負ひ、前に熊野なだを望み、境内さして廣からねど、くまなくはき清められて、いと神々し。社殿の右手に、幾百年を経た

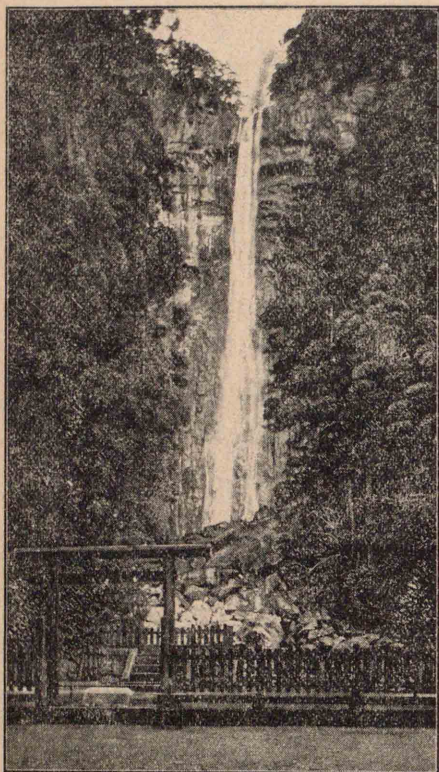
紀 驅 内境

枝

札西

りと思はるゝ楠の老木あり。枝葉空をおほひて、神域に一段の森嚴を加ふ。

玉垣一つをへだてて相隣するは、青岸渡寺なり。古來那智觀音の名によりて名高く、西國第一番の札所なり。



寺門を出て、こけむしたる坂道を下りて、那智の瀧の正面に立つ。仰げば、百數十米

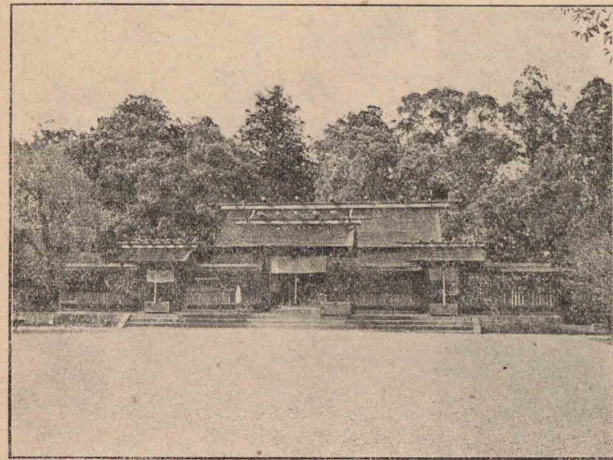


美言

の中空より落來る瀧、初は水筋通りて見ゆれども、岩に當り石に碎け、下は漠々として雲の如く綿の如く、美觀言語に盡くし難し。

新宮

那智山を去つて、新宮市に至る。熊野川の川口に近く、幾十萬本とも知らぬ材木を浮かべたる大貯木場あり。附近には大小の製材工場多く、さすがに木材の集散地たるを思はしむ。



材貯

淵

熊野速玉神社に參詣す。いはゆる新宮なり。社殿は、熊野川を背にして、老杉かげ暗き所にあり。鳥居をくゞりて進めば、なきの古木あり。平重盛の獻ずる所と傳ふ。一枚の落葉もとゞめぬ前庭の芝生に、眞白き鳩の群遊ぶも、すがくし。寶物を拜觀して、國寶の多きに驚く。

瀧

瀧行のプロペラ船に乗る。川舟に、發動機と、飛行機のプロペラとを取付けしものなり。すさまじき爆音を立てながら、瀧といはず淵といはず、飛ぶが如



秀

くに進む。さかのぼるに従ひて  
山いよ／＼秀で、水ますます清し。  
時に、名物の筏いかだのい／＼として  
流れ来るに會ふ。三時間にして  
瀨の入口に達す。舟は爆音をを  
さめ、櫓ろの音始めてのどかなり。

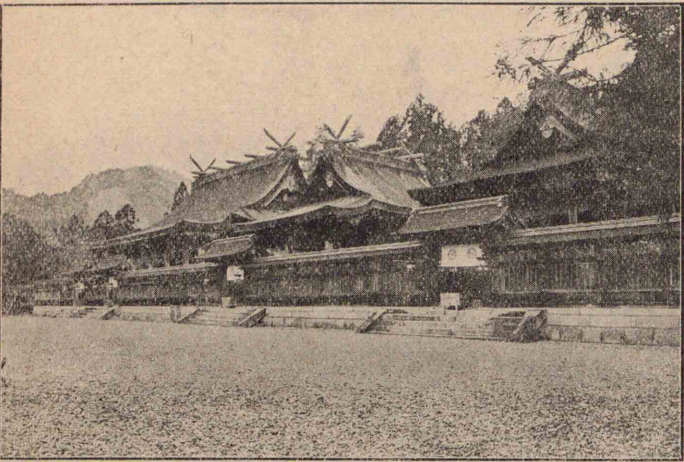
兩岸の絶壁、あたかも屏風びやうぶを立  
てたる如く、流はよどんで底知ら  
ぬ青さをたふふ。進むに従ひて現れ来る奇岩、怪石、  
時に或は小さき瀧をかけ、或は深き岩穴を作る。四



怪

邊靜かにして、たま／＼野猿やゑんの叫びを聞く。

本宮



瀨を下り、再び熊野川をさかのぼつて本宮に向かふ。  
川原に舟をすて、行くことわづかにして、小高き山のふもとに大鳥居を望む。杉の木立かげ暗き石段を上れば、熊野坐くまのにます神社なり。うやく／＼しく神前にぬかづく。地高ければ氣もま



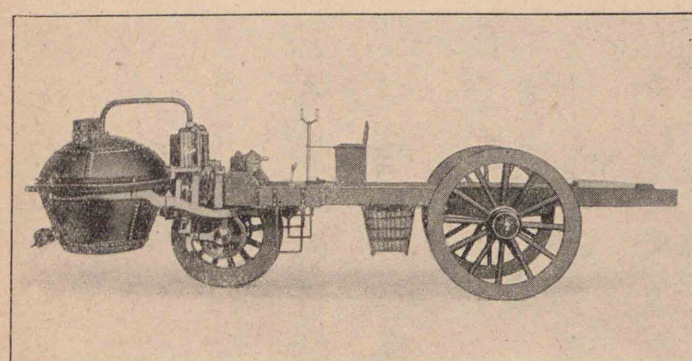
尊稱

たすみいと静かなる境内なり。  
本宮新宮那智は、世に熊野三山と稱せられ、古來朝野の尊信極めて厚く、行幸御幸のありしこと、數十回の多きに及べりとぞ。

第二十五 汽車の發明

蒸氣機關が出来たのは、二三百年も前の事であつたが、初の中は、炭坑たんかうなどで水を汲上げたり、掘つた石炭を地上に引上げたりすることに使用されるに過ぎなかつた。

企



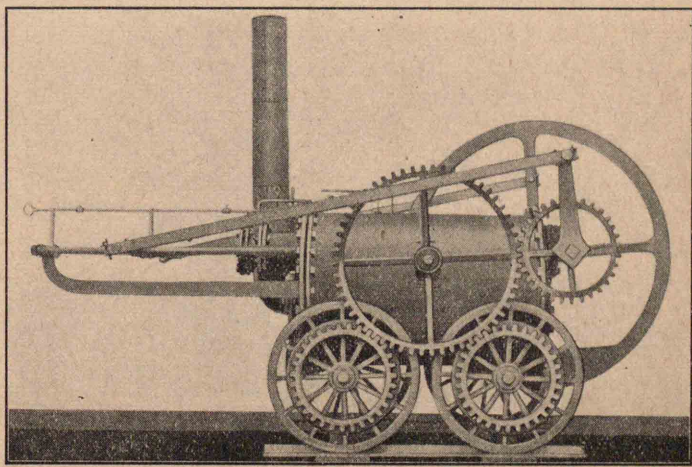
フランスのキュニヨールは、これを車に取付けて走らせようと企てた。これが、そも／＼汽車といふものを造らうとした最初で、今から百數十年前の事であつた。此の時出来上つたのは、荷車に蒸氣機關を装置したやうなもので、速度もおそく、人の歩くくらゐの速さに過ぎなかつた。

其の後、イギリスのトレビシツクといふ人が、キュニヨールの汽車に大



改良を加へた。それが七八人の人を乗せて、ロンドンの市中を走り廻つた時、市民は、始めて見る地上の怪物に驚の目をみはつた。其の後、彼は更に大改良を加へ、どうく、レールの上を走る汽車を造り上げた。

それ以來、追々汽車の効用がみとめられ、炭坑などではかなり用ひられるやうになつたが、まだ旅客や貨物を運ぶには至らなかつた。



それが今日の如く發達して、重要な交通機關となるのには、一にスチーブソンの力にまたなければならなかつた。

羊  
スチーブソンも、イギリスの人であつた。家が貧しかつたために、八歳の時から人にやどはれて、牛や羊の番人をした。しかし、生まれつき機械の好きを彼は、暇さへあれば、小さな水車を造つて小川にかけたり、粘土で汽車を造つたりして楽しんでゐた。

其の後、或炭坑にやどはれて、蒸氣機關を取扱ふことになつた。彼の喜はたとへやうもなかつた。晝

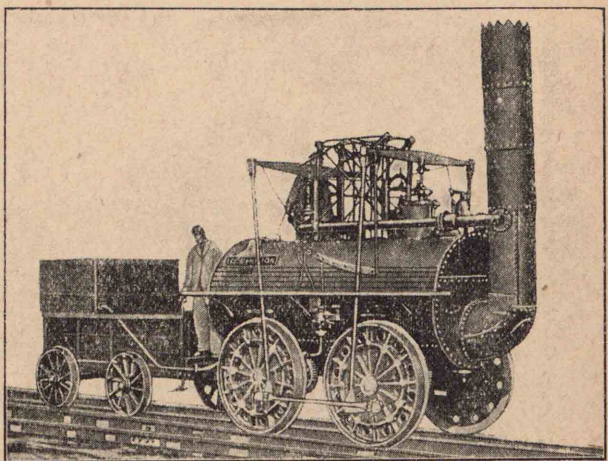


は仕事をしながら、機械の組立を研究し、夜は夜學に通つて一心に勉強した。さうして、よい汽車を造らうとして工夫に工夫を重ねた。

其の頃、イギリスの或會社で、鐵道馬車を始める企があつた。スチーブンソンは、馬車の代りに、自分の工夫した汽車を用ひることをすゝめた。會社でも此の意見を採用して、先づ汽車の試運轉を行ふこととなつた。

いよく其の日になつた。スチーブンソンは、息子と共に機關車に乗込み、たくさんの貨物と大勢の

試

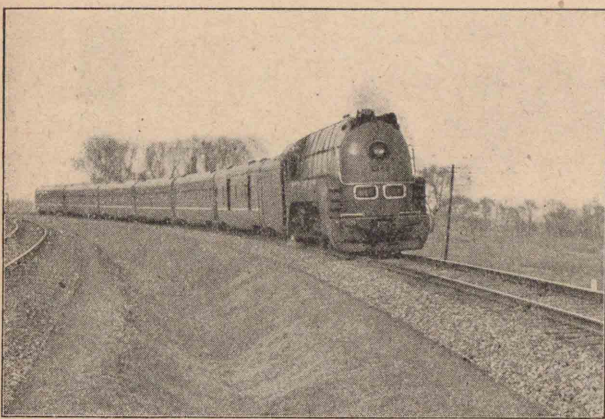


人を乗せて、勇ましく發車した。汽車が次第に速さを増して、一時間約二十料の速度で走つた時には、乗つてゐた人も見てゐた人も、其の速いのと勢のすさまじいのに驚いた。これは今から百年餘り前の事であつた。スチーブンソンは、其の後なほ研究を續けて、一時間五十料も走る汽車を造り上げることに成功した。其の構造は、大體今日のものに似てゐる。



第二十六 「あじあに乗りて

九時大連發の「あじあ」に、僕は乗った。見送りに来た母が大勢の人にまじつて見える。



「おかあさん、行つて参ります。」  
僕が手を挙げると、母も挙げた。車窓を開くことが出来ないの、僕此の言葉も通じないらしい。母も何か言つてゐるやうだが、こ

舉

掌

ちらにはわからない。「あじあ」は流れるやうに動き出した。僕は、春休をハルビンの叔父おぢの所へ遊びに行くのである。一度乗つて見たいと思つた此の汽車に乗れて、實に嬉しい。

やがて金州にさしかゝると、車掌さんが説明する。「右手は大和尚山たいわしやうで、關東州第一の高山、其の手前の岡に、乃木勝典中尉かすけの記念碑があるのです。左には、金州城が手に取るやうに見えませう。そゞろに、乃木將軍の詩もしのばれるのであります。」  
雪の少い南滿洲の畠はよく耕されて、農家がぼつ



巢

ぼつ見える。沿線の楊やなぎの木に、かさぎが巢を幾つもかけてゐる。僕がそれを見てみると、「何を見てゐるの。」

と、後から聲をかけた者がある。ロシヤ人の女の子だ。

「あのかさぎの巢を見てゐるのさ。」

しかし「かさぎ」といふ日本語がわからないらしい。「鳥の巢。」と言つたら、すぐわかつた。此の子は新京へ母と歸るところで、マルタといふ名ださうだ。

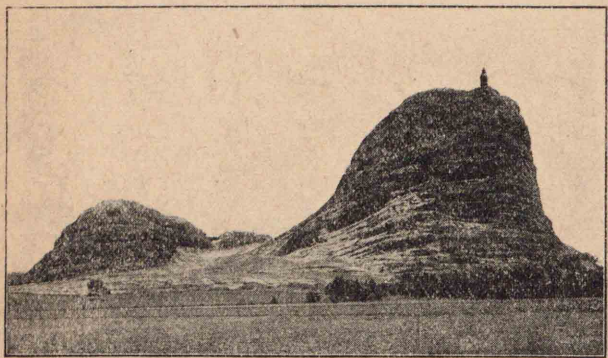
「おかあさんは、あそこ。」

と指さした所に、緑色の上着を着たロシヤ婦人が、分厚な本を讀んでゐる。

熊岳城ゆうがくじやうに近づくと、望小山が見え出した。あの山

の傳説を話してあげようと言へば、マルタはお晝御飯をたべながら、母と一しよに聞きたいと言ふ。三人は食堂車へはいつた。ロシヤ少女が、給仕をして働いてゐた。

「昔、母と子と二人暮しの家があつた。息子は、勉強のため山東へ渡



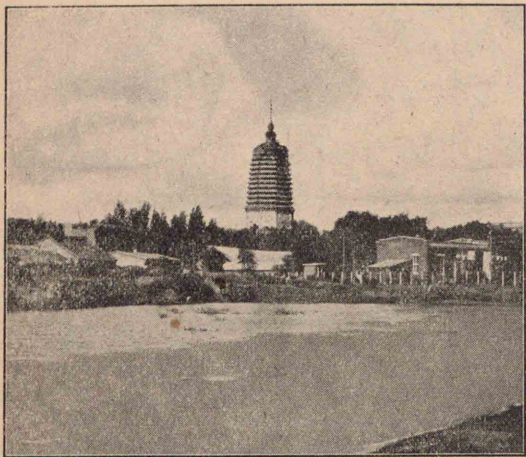


故

つて行つた。何年かたつてもう歸つて来る頃になつたので、老母は、毎日々々望小山に登つて待續けた。息子は、一生けんめいに苦學したかひがあつて、りつぱな身分になり、いよく故郷に歸ることになつた。ところが途中海が荒れて、息子は船と共に沈んでしまつた。老母は、そんなこととはつゆ知らず、風の日も雪の日も待つてゐたが、遂に山の上でなくなつたといふ。

大石橋で始めて停車した。ホームに出ると、風が冷たい。車掌さんが、ボーイに、「もう少し、車内の温度

鋼



を上げてくれたまへ。」と言ひつけてゐた。

北の方では二三日前に雪が降つたので、遠い山の峯が白くなつてゐる。何だか空が曇つて來た。鞍山の製鋼所から茶色の煙が立ちのぼり、ほのぼが勇ましく見える。間もなく、遼陽の白塔が眺められた。落着いた、美しい形である。太子河を渡る。「あじあ」は防音装置がしてあるので、外の響が車内にやかましくは聞えない。



「あじあ」のスタンプを押しませんか。  
ボーイがさう言つて来たので、僕は、ノートに二つ押  
してもらつた。

岐

奉天に着いた。安東吉林北平ペイピンへの分岐点なので、  
列車が幾つも止つてをり、満人の赤帽が忙しさうに  
荷物を運んでゐる。驛前には、馬車や自動車がたく  
さん往き来してゐる。こゝで、兵隊さんがどやくと  
乗つた。奉天はまことに平な大都市で、たゞ北陵ホクリョウ  
の松林が小高く見えるだけである。

雲が切れて、日光がさして来た。雲はしきりに流

れて、早春の畠を、野を、其の影がはつ  
て行く。「あじあ」は、雲の影を超越し  
たり追越されたりして、満洲の大平  
野をまつしくらに突進する。

四平街に着く。こゝからチハ  
ルへ線が分れる。大きな構内には、  
冬になると、大豆の山が積まれるの  
ださうだ。

やがて一人の兵隊さんが僕に、  
「あそここの岡を知つてゐるかね。」





あれは公主嶺こうしゅりやうで、昔、ロシアのコサツク兵は、あそこで教練したのだが、今は農事試験場の羊や牛が、かけっこをしてゐる。

と、元氣よく話しながら、日にやけた顔で笑つた。向かふの農家に、満洲國旗がひらめいてゐる。そばで、満人たちが耕作の手を休めて、こちらを眺めてゐる。

「汽車の影が長くなつた。」

と、マルタが言ふ。汽車の影だけではない。電柱の影も木の影も、ずつとのびた。「あじあは、一氣に國都新京に迫りつゝある。遠く國務院や、關東軍司令部

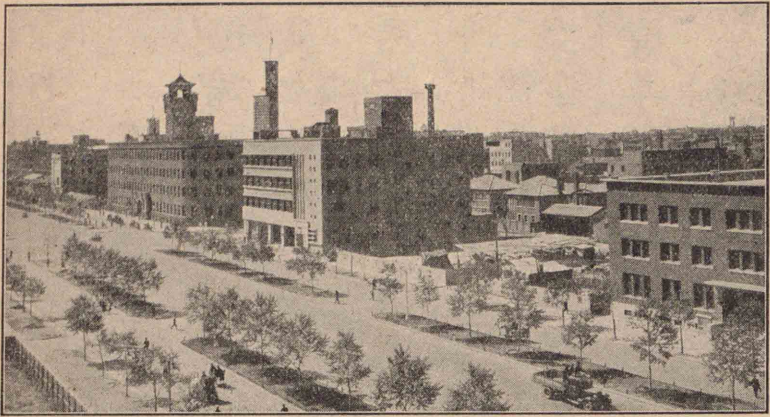
司

の建物が夕日に映え、新しい住宅や、街路樹があざやかに見える。

兵隊さんたちは新京で下車した。僕がおじぎをすると、みんな勢よく舉手をする。マルタも、おかあさんと一しよに下りて行つた。急に車内がさびしくなる。

「さやうなら。」

マルタは、飛上りながら手を振つた。





日が沈むところだ。大きくて、赤くて、上海蜜柑しゃんはいみかんのやうだ。夕日と僕との間には、さへぎる物一つない。明日また、お日様、ごきげんよう。鳥の群が地上から飛上つた。薄紫の夕空には、ばら色の細かい雲がたなびいた。それを見てあたら、母を思ひ出した。さうして、もうしばらく別れてあるやうな気がした。夕食をすましてから母に手紙を書かうと思つて、食堂車へ行つた。

食卓しょくたくには、電燈が明かるくついてある。ロシヤ少女の給仕が僕の顔を見覚えて、にこ〜しながら

印

ら食事を運んでくれる。どこか知らない驛に停車した。大きな木の上に星が光つてある。

「あじあ」の印のはいつた用紙に手紙を書いて、晝間押してもらつたスタンプを入れて、ポイーに頼んでしまふと眠くなつて来た。

気がつくとき、あじあは何時の間にか町にはいつてゐた。さうして、時間表通り二十一時三十分に、ハルビン驛にびたりと





停車した。僕が急いで下りると、突然、

「やあ、よく来たね。一人でよく来たね。」

と、叔父の聲。僕の手は、がっしりと握られてゐた。

真冬のやうに寒い夜だ。空には、半月がさえかへつてゐた。

第二十七 御民われ

御民われ生けるしるしあり天地あめつちの榮ゆる時にあへらく思へば

天地の榮える此の大御代に生まれ合はせたのを

聖 新 喜

思ふと、一臣民である自分も、しみぐと生きがひを感じずるとよんでゐる。其の大きい、力強い調子に、古代の我が國民の素朴そぼくな喜が、みなぎつてゐる。昭和の聖代に生をうけた我等は、此の歌を口ずさんで、今新なる歡喜を感じるのである。

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん

のどかな春の日の光の中に、あわたゞしく散りゆく櫻の花をよんで、優美の極みである。平安時代の  
大宮人たちは、かうした心持を心ゆくまで味はつて、



初

都の春を楽しんだのであつた。

箱根路をわが越えくれば伊豆づの海や沖の小島に  
波のよる見ゆ

源實朝は、鎌倉時代みなものさわとものすぐれた歌人であつた。箱

根山から伊豆山へ越えて行くと、彼方沖の初島に、白  
い波が打寄せてゐるのが見えるといふ、畫のやうな  
歌である。

敷島のやまと心を人間はば朝日ににほふ山ざく  
ら花

さしのぼる朝日の光に輝いて、らんまんと咲きに

揚

ほふ山櫻の花は、如何にも我がやまと魂をよく現し  
てゐる。本居宣長もとをりのりながは、江戸時代の有名な學者で、古事  
記傳を大成して、我が國民精神の發揚につとめた人、  
まことに此の人にふさはしい歌である。

一つもて君を祝はん一つもて親を祝はん二もと  
ある松

明治時代の學者であり、歌人であつた落合直文おちあひなほぶみが、

旦 壽

元旦に門松をよんだ歌である。二本の門松の中、其  
の一本を以て聖壽の萬歳を祝し奉り、其の一本を以  
て親の長壽を祈らうといふ意味で、新年において我



抱

等の抱く心持がすらくと品よくよみ出されてゐる。我等は此の歌を聲高くよんで、其の何ともいへぬほがらかなつゝましい心を味はひたいものである。

揚	秀	解	峽	滴	薄	響	帝	紋
旦	怪	票	絡	閣	鮮	徵	念	硯
壽	稱	豫	聳	髮	菽	塊	察	異
	企	舉	密	暇	夢	晶	獨	啓
	羊	揭	制	獻	郵	鈴	湧	科
	掌	增	健	舵	便	碎	想	博
	巢	衰	康	構	浸	奪	雜	採
	故	紀	仇	巨	嚴	鷄	化	驗
	鋼	驅	騷	瞬	備	皿	競	貨
	岐	札	罪	綱	吉	陶	養	烏
	司	材	預	裂	量	甚	迫	未
	印	貯	件	準	慈	救	薪	陷
	聖	淵	政	歡	袖	沒	瀧	某

終



昭和十三年五月二十三日修正印刷  
昭和十三年五月二十五日修正發行  
昭和十三年五月二十五日翻刻印刷  
昭和十三年六月十七日翻刻發行

著作權所有

著作兼  
發行者

文  
部  
省

小學國語讀本尋常科用卷十

定價金拾五錢

昭和十三年六月一日  
文部省檢査濟

翻刻發行  
兼印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地<sup>28</sup>  
日本書籍株式會社

代表者 大橋光吉

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地  
日本書籍株式會社工場

發行所 日本書籍株式會社



庫

38

304

広島大学図書

2500028304

